

第28期世田谷区社会教育委員の会議活動報告書

子どもの現代的貧困の解決に向けた社会教育施策の提言

ー第三の大人・若者の発掘とネットワークづくりに向けた仕組みづくりー

令和2年4月10日

世田谷区社会教育委員の会議

目次

はじめに	1
第1章 会議の検討にあたっての課題認識	2
1 第27期会議「中長期ビジョンの提言」の共有について	
(1) インフォーマルな「共の世界」を豊かにする	
(2) 「共の世界」を育むプラットフォームをつくる	
(3) 第三の大人のネットワークをつくる	
2 会議の活動経過(第1回～第11回)	6
第2章 「関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策」の検討	
(第1回～第3回)	7
1 関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策について	
2 困難を抱える子どもの特徴と対応について	8
3 子どもの貧困と関係性の貧困について	9
第3章 公開ワークショップ「みんなで語ろう！子どもの貧困と関係の豊かさ」	
(第4回～第6回)	11
1 開催趣旨	
2 実施概要	
3 各班意見交換図(1班～8班)	12
4 アンケート集計	20
第4章 「関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策」の具現化	
(第7回～第11回)	24
1 課題抽出・整理	
(1) 私たちが日頃の子どもたちのSOSをキャッチするために何が必要か	
(2) 子どもの困難に関心を寄せる者同士がつながり合うには何が必要か	
(3) 私たちが困難を抱える子ども・家庭とつながり合うには何が必要か	
2 ー提言ー第三の大人・若者の発掘とネットワークづくりに向けた仕組み	29
(1) 方策の柱1 第三の大人・若者の発掘と顔の見えるネットワークづくり	
方策案①第三の大人・若者の発掘と顔の見えるネットワークづくり	
方策案②「講演会・養成講座・ワークショップの開催」	
(2) 方策の柱2 つながれない子どものケア	
方策案①「ネットですつながる学習支援」	
おわりにー問題解決の分水嶺ー	33

資料

☐	資料 1	意見交換図	3 5
☐	資料 2	現代的貧困の共通理解に向けたメモ	3 7
☐	資料 3	公開ワークショップチラシ	3 9
☐	資料 4	第三の大人の発掘とネットワークづくりに向けた仕組み案	4 0
☐	資料 5	社会教育主事・社会教育指導員に期待される役割とは	4 1
☐	資料 6	社会教育主事・社会教育指導員が発掘するための仕掛けとネットワークづくりに向けた方策案	4 2
☐	資料 7	第 2 8 期世田谷区社会教育委員名簿	4 6
☐	資料 8	第 2 8 期世田谷区社会教育委員の会議事務局名簿	4 7

はじめに

今期の第28期の社会教育委員の会議では、前期会議のまとめで結論づけた、関係性の貧困からの脱却に向けた「どんな状況にあっても生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境のあり方」の整備が重要であるという方向性と、①「インフォーマルな『共の世界』を豊かにする」②『共の世界』を育むプラットフォームをつくる③「第三の大人のネットワークをつくる」という3つの方策を、さらに教育行政の具体的な施策となるようにと諮問を受けた。

前期会議の結論づけた経緯としては、「子どもの貧困をめぐる」をテーマの方向性とし、議論を進める中で現代的な子どもの貧困の連鎖は、経済的貧困だけではなく、むしろ「関係性の貧困」がバックボーンとなっていることが見えてきた。そこで、社会教育的観点からのアプローチとして貧困からさまざまな関係や場への参加から疎外される「関係性の貧困」に着目したことにある。詳細は、区のホームページから「第27期世田谷区社会教育委員の会議活動報告書」をご覧ください。

今期の会議では上述のように、1つの方向性と3つの方策からより具体的な施策を目指し、11回の会議（平成30年6月～令和2年5月）を重ねた。また、その中で具体的な施策を目指す上で、定例の会議だけではなく、地域で子ども・若者に関わる活動者からの「現場の声」を手がかりにするために、社会教育委員の会議主催による公開ワークショップを開催した。

公開ワークショップでは、前期の3つの方策と連動する形で、①「私たちが日頃の子どものたちのSOSをキャッチするには何が必要か」②「子どもの困難に関心を寄せる者同士がつながり合うには何が必要か」③「私たちが困難を抱える子ども・家庭とつながり合うには何が必要か」の3つのテーマから大変貴重な意見をいただくことができた。

世田谷区では、令和2年度からの「子ども計画（第2期）後期計画」の策定に向け、子どもの貧困対策の全体像を定め、重点施策を含め、総合的な対策を講じていくために、「子どもの生活実態調査」を平成30年度に行った。翌年度には「子どもの生活実態調査」の報告会が開催され、それによれば、「困窮層と周辺層を合わせた生活困難層の子どもの割合は、小学5年生では11.7%、中学2年生では13.9%」とし、「仮に世田谷区で、0歳から17歳の子どもの生活困難層が10%いるとするならば、約1万2千人の子どもが生活困難層と推定される」との報告がされた。

このようなことから、第28期の会議（平成30年6月～令和2年5月）では、「関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策」の具現化をするために、区内に広がる「共の世界」を育むプラットフォームをつくるためには、日常のインフォーマルな「共の世界」を豊かにすることが不可欠で、それには第三の大人・若者を増やし（新規発掘）ネットワークをつくることが重要である。また、第三の大人・若者（関心を寄せる者同士）が増えつながることで、子どものSOSをキャッチできるとともに、“困難を抱える当事者とつながる”ことができる。つながり合えるきっかけとして社会教育行政の専門職である社会教育主事・社会教育指導員によるコーディネーターの仕掛けが必要であるとし、社会教育行政の専門職としての今後のあり方を提言するに至り、活動報告書としてとりまとめた。

第1章 会議の検討にあたっての課題認識

1 第27期会議「中長期ビジョンの提言」の共有について

第28期の会議は、前期の提言を引き継ぐ形で、関係性の貧困からの脱却に向けた「どんな状況にあっても生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境のあり方」の整備が重要であるという方向性と、①「インフォーマルな『共の世界』を豊かにする」②『共の世界』を育むプラットフォームをつくる③「第三の大人のネットワークをつくる」という3つの方策から、さらに教育行政の具体的な施策となるようにと諮問を受けた。そこで、検討にあたり課題認識を明確にするために、前期の提言の共有を行なった。以下は、前期の活動報告書より抜粋したものである。

第27期の会議では、「関係性の貧困」について議論してきた結果、問題解決的に関わるよりも生きづらさに寄り添っていくような関係性を大事にしていく必要があるのではないかという視点に至り、「どんな状況にあっても生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境のあり方」の整備が重要であるという結論に至った。

図2（P5）は、そうした環境のあり方の全体像をイメージ化し、今後、行政、市民、民間当事者が互いにどのような関係性や場を育んでいけばよいのかを構造的に示したものである。そして、この環境整備を進め、当事者を「共の世界」や公へつなぐことを柱に3つの方策を提言した。

（1）インフォーマルな「共の世界」を豊かにする

人々がインフォーマルに出会い、交流し、楽しみ、育ち合え、自然と助け合える関係が生まれてくる場を「共の世界」と定義する。それはいわば、地域の居場所やサロン、縁側的な場である。

関係性の貧困状態にある当事者が公的支援制度や支援施設につながるには、まず人と人との自然につながるチャンネルを身近な日常につくっておくことが必要である。公共施設はあっても、とりわけ小さな子どもの生活圏には存在しないことも多い。だからこそ、もっと子どもの方から自然と近寄っていける、身近で日常的な関わりの場をつくることになる。

そうした「共の世界」を豊かにすることで、当事者（親や子ども）が適切な制度やサービスにつながったり、日々の日常の中でさりげなくSOSを出せるようになったりする環境づくりが重要である。

趣味、実学、スポーツ、社会的課題への学習などを通して多様なサークル仲間やつながりの場を創出する仕事を担ってきたのは、社会教育・生涯学習行政である。「関係性の貧困」問題の観点から見ても、インフォーマルな「共の世界」を創出する担い手としての、社会教育・生涯学習行政の今日的意義は大きい。

（2）「共の世界」を育むプラットフォームをつくる

（1）に提言した「共の世界」から、当事者が適切な支援制度やサービスにつながっていくには、公的施設・機関、市民団体・活動、民間事業者が互いにつながりあい、いざというときに協力し合える生きた連携が必要になる。それには区内外にどのような

社会資源、地域資源があるのかの可視化が求められる。

例えば貧困をめぐる当事者が、一見無関係な高齢者福祉、医療保健機関等からつながることがある。また保健所が若い親の最初の支援機関として入り口となり、親子サークルの情報提供へ結びつくこともある。

だからこそ、教育機関だけではなく、近接領域の機関や専門職、市民活動団体や場ともつながり、情報を共有する必要がある。そこで得られた支援情報やノウハウを、生きづらさを抱えている子どもの行きそうなところ、ネットカフェやコンビニエンスストアなどに具体的な支援情報を発信したり、スマートフォンや携帯電話から情報をキャッチできるようなアクセスを考えたりすることも有効になる。

(3) 第三の大人のネットワークをつくる

ここでいう「第三の大人」とは親や、教師以外の大人で、地域の課題解決に心を寄せるボランティアな人々を指している。それは必ずしも公的な役職であったり、専門職としての制度的な責務としてではなく、個人の志で動く「一般の市民」を指している。それは問題行動をなくすための人ではなく、社会適応できない生きづらさに寄り添える関係の持てる人である。

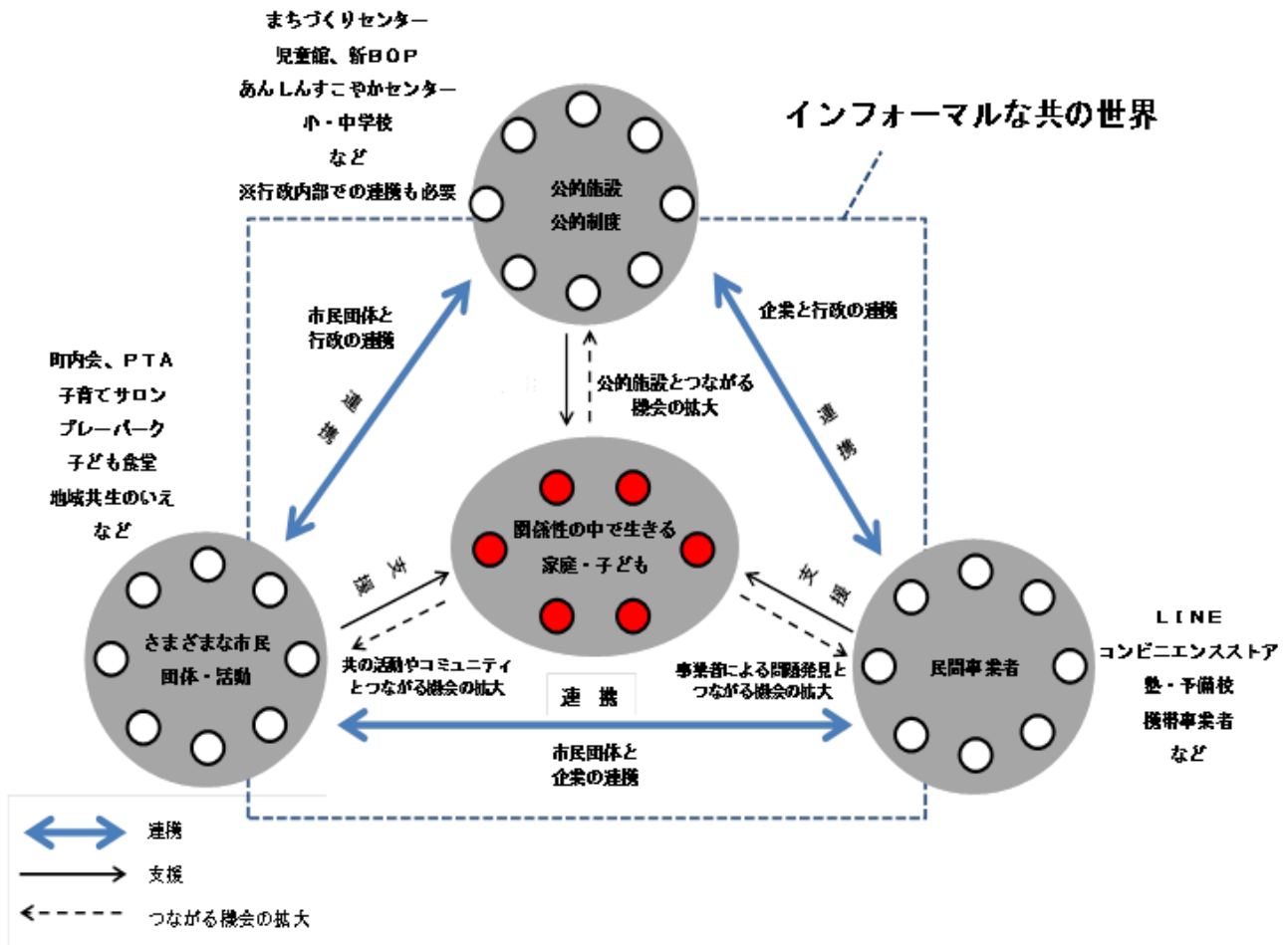
かつては、町工場の経営者や地元で働く職人や農家の方といった人々がこうした「第三の大人」となり、ネットワークをつくり、さりげない見守り役や地域のつなぎ役となっていた。しかし社会構造も大きく転換し、宅地化と都市化、高齢化の中でこうした存在も人的ネットワークも衰弱している。

この古くて新しい「第三の大人」という一般市民を発掘し、いかに増やしていけるかが問題解決の重要な鍵になる。問題が「関係性の貧困」である以上、経済支援、物理的支援だけでは解消されない、生きづらさに寄り添える関わりの力が不可欠だからである。

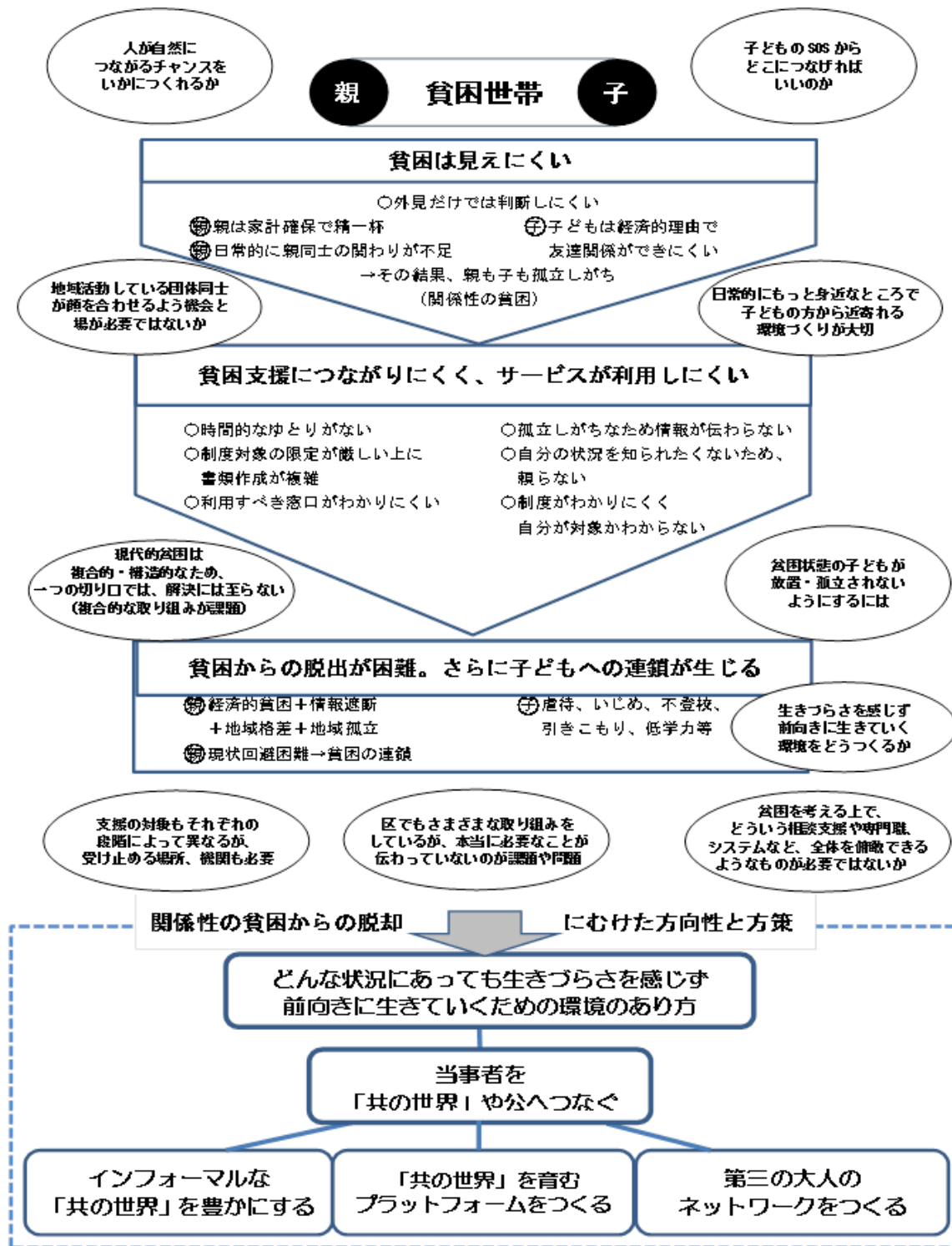
このような人の力を掘り起こすには、一般市民にとっても入り口が広くて「共の世界」に関わりやすい環境が必要になる。そのためには、一般市民にとっても、地域で他の人との関わりをつくりやすい居場所、縁側的な場も必要になる。

このように、(1)で提言したインフォーマルな「共の世界」の創出によって「第三の大人」の発掘と確保がなされ、(2)で提言した「共の世界」を育むプラットフォームを通して、第三の大人同士のネットワークを生み出していく。このようなボランティアな一般市民同士の支援ネットワークが媒介となることで、当事者が日常的で身近にSOSを出せるインフォーマルなつながりを見つけたり、公的制度へつながったりする確率が高まると考える。

【図1】「関係性の貧困」の課題解決に向けた環境のあり方



【図2】子どもの貧困問題への社会教育的アプローチ（概要版）



2 会議の活動経過（第1回～第11回）

今期の活動経過は以下の通りである。

- 第1回 平成30年6月21日
「テーマの方向性の検討」
- 第2回 平成30年8月22日
「テーマ設定の方向性に対する活動内容の検討」
- 第3回 平成30年10月10日
「方策や施策化をめぐる意見交換（1）」
- 第4回 平成30年12月5日
「第5回に向けての意見交換」
- 第5回 平成31年2月12日
「公開ワークショップに向けての意見交換」
- 第6回 平成31年2月24日
「公開ワークショップ『みんなで語ろう！子どもの貧困と関係の豊かさ』」
- 第7回 令和元年5月29日
「課題抽出・整理と方策について」
- 第8回 令和元年7月19日
「課題抽出・整理と方策②と骨子案の検討について」
- 第9回 令和元年10月18日
「活動報告書素案の検討について」
- 第10回 令和2年1月30日
「活動報告書案の検討について」
- 第11回 令和2年2月20日
「第28期社会教育委員の会議活動報告書のまとめ」

第2章 「関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策」の検討（第1回～第3回）

本会議では、関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策をより具体的な施策化に向け、先に掲載した図2をもとに、各委員よりこれまでの経験や現在の活動を通して感じ取っている子どもの様子や、家庭の様子等について意見交換を行なった。

1 関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策について

- 人々のインフォーマルな出会いとは、日常の中に偶発的に埋め込まれている人との出会い、交流、楽しみ、その中で育ち合ったり、自然と助け合える関係が生まれてくるといった場や機会のことをいう。
- インフォーマルに交流する、あるいは関係をつくっていくことによって、初めて身近なところでSOSを出せる機会がつくられるのではないかな。
- 遠いけれどもインフォーマルに普段話ができる仲間の方がサポートネットやセーフティネットになっていくのではないかな。
- インフォーマルに人が集うには、集まりやすい環境とそれぞれが横につながっていくようなプラットフォームが必要。
- 区内には、子ども・若者支援関係団体は非常に多く存在しているが、横同士など隣接領域で一堂に会することがなく、プラットフォームになる仕組みがあまりないのではないかな。
- 報告書のコラムにあるような、様々な若者に関わる団体や若者自身も一緒になってネットワークをつくることを目的に動き出している団体がある。こうしたプラットフォームを豊かにすることが大事。
- 第三の大人とは、親や教師以外の大人で地域に心を寄せるボランティアな人々のことをいう。
- 都市化する中で、もう一度第三の大人に焦点をあてて、生きづらさに寄り添っていくような関係性を持てる第三の大人を発掘し、つなげていくことが重要。
- 区でも各種支援事業を実施しているが、それでもこぼれ落ちてしまうのは、こうした生きづらさに寄り添える関わりの力が不足しており、普通の一般の方々を発掘し、ネットワークをつくる必要がある。
- 前期で示した、どんな状況にあっても前向きに生きていけるというのは、子ども自身がそういう力を持って生きていってほしいというのが前提にある。そういう力を育ていけるような環境づくりは、公助の部分なので、共助、公助がやらなければならない。
- 子どもの貧困対策ということで、地域活動や資源を対策につなげていくためのコーディネーター役を基礎的自治体が担うというニュアンスだが、自治体は担えないと思っていて、それは共助で、地域の大人たちがどういうふう組織をしていくのかは議論していかなければならない。
- 行政と民間ができることはそれぞれあって、行政からアプローチされた方がいい方と、たまたま子ども食堂に来てくれていろんな事情の話を聞きながら、気持ちが解けてつながるということもあった。切れ目なく、息長くできるのは、やはり地域の人たちだが、例えば、子ども食堂であってもいろいろものがあるので、それをどううまく張り巡らせていくのかを感じている。

- 子ども食堂は非常に評価したいと思っている。それは地域の力で食を通じて共助が始まったわけで、少なくとも行政が始めたという話は聞かない。ただ、非常にすばらしい取り組みだと思う反面、別のアプローチの仕方もあると思うので、それがこれからの議論だと思う。
- 公の部分で何か施策をやっていかなければならないが、共を膨らませるには何かをやってあげるといような形だと膨らまないと感じているので、共が膨らむには何が必要なのか、それを吸い出させるような施策を考えるべきではないか。
- 行政として、地域の力を引き出すようなコーディネート役、引き出していけるような仕組みを考える。社会教育行政は、サークル活動の支援や講座を開催してそこに集まってくる人たちがサークルをつくって自立することをバックアップすることなどが仕事なので、新たな活動が生み出されるようなサポートをするというアプローチもある。そのあたりを研究しながらどんなことが可能なのか、アイデアを膨らませられるかもしれない。
- 民間でも、インフォーマルな共というのは、ボランタリーに湧いて出てくるというか。施策を考えるというと、とかく上からぼんとおろしてしまうような発想になりがちだが、私たちがそれぞれの立場から自発的につながり合って、どう豊かになっていくかという視点でいけたらいいと思う。そうでないと、多分長続きはしないし、現場は生き生きしないと思う。
- 第三の大人を発掘しつつ、つながりやすいような環境をどうつくるか。世田谷区は全国的にも市民活動が盛んであると評価が高いが、それでも、まだ個々になって動いているところもあったりする。そこがつながっていく必要があるわけで、どういう環境になったらいいのか、ぜひここから議論を深めていけたらいいと思う。
- 関係性の貧困があって生きづらい人が、集まりに来るかは疑問。それよりはむしろ、地域のために何かをしようという人たちをまず招き入れて、今の活動に理解を深めてもらいつつ、その方たちが今度、それぞれの地域に渡って、またそこで小さな集まりの輪を広げていく中で、広く浅く地域に落としていく活動の方がやりやすいのかなという気がする。
- 社会教育というのは大きく2つの柱があって、1つは人々の生きがいに関わる課題、趣味とか教養とか、実用的な資格、知識を学び、生活の潤いをつくっていく、そういう学びの支援をするのが1つ。もう1つは、個人だけではやっぱり解決できないというか、社会的に共有しなければいけない課題を拾って、共有して、学習課題にして、学び合っていく。それを通じながらお互いにつながり合っていく、その両方を柱にして、社会教育の仕事はある。
- そういう意味では、シンポジウムやワークショップなどは、1つの大きな手段としては非常に有効だと思う。

2 困難を抱える子どもの特徴と対応について

- 子どもの貧困や関係性の貧困も含め、学校ではなかなか見えないが、BOPでは親の様子や子どもの様子がわかることはあるのか。
- 学校では大人しい、家へ帰っても大人しいが、学童クラブの特にひとり親家庭の子どもの場合、BOP・学童に来ると暴れるというケースがあった。親に対して

気を遣い関係性の貧困との関係があるのでは。

- 微弱なサインをキャッチする大人の側のセンスがかなり問われる。
- 子どものプライドは大人以上に高いので、仲間がいる中で比較的自分が困難だというSOSは出さないことが多く、子ども食堂の帰り道で本音を出すことがあるため、聞き逃さないようにしている。
- 子どもより親の関わり方が変わってきているので、特に低学年では親のことを気にしたり、よく見られたい感じが見受けられるので、学校や家庭でもないBOPでは羽を伸ばす姿は見られる。
- 学校では見せないがBOPで見せるとか、児童館で見せるとか、そうなるコラボレーションなど横のつながりをつくっていくことが重要ではないか。
- BOPや学童、児童館という場所は、何かしらの状況をつかむ場所になり得ると思うし、そういう場所で子ども食堂や学習支援などが行なわれればつながっていくことにもなるのではないか。
- 暴れている子どもなど、大人から思うと不適切なとても扱いにくい状況を出す子どもというのは、心のどこかにうまく吐き出せない苦しさを持っていることがある。
- 最近、両親とも忙しい家庭が増え、持ち物や何かにつけ、昔では考えられないようなケースも見受けられる。基本的な家庭教育の部分でできていないことがあると思う。
- 困難な家庭に気づくと、子どもは微弱なサインを学校だけではなく、いろいろなところで出しているというのが見えてきた。
- 子どもは自分の置かれている状況が困難かどうかは、他の家庭を知らないで、特に関係性の少ない子どもほど、自分が大変な状況とは理解していない。
- 悪いこととレッテルを貼るのではなく、その子の困難はどこにあるのか、なぜそういう行動をとるのかということをいろいろな大人が見る中で話し合うことが大事。
- 「共の世界」で、例えば、心配な子どもがいた場合は、それを長く見守れるのは地域であると思う。子どもにどういうケースがあるのかは分からないが、それを受け止められるのは地域であって、課題を抱えた子どもにいろんな人たちがみんなな守秘義務を持って接しているので、漏れることもないし、その子どもを中傷する子どもたちもない。
- 子ども食堂に来た子どもに、別の夜会った時声をかけることができ、そういうところでの会話から何を拾うかということが、地域の目だと思う。ちょっと声かけられる関係性、そんなことから始まっていったらいいし、それを見つけた先に関われる場所が用意されることもあわせて必要。
- 今の子どもたちが生きづらさを抱えたまま成長していくと、その子どもに関わる比較的年齢層の近い大人、より世代が近い人たちが中心になった方がいい。

3 子どもの貧困と関係性の貧困について

- 世田谷区の子どもの場合、正直貧困の現状が実感できない。
- 生活支援を受給するような家庭の話と捉えるのか、それとも関係性の貧困になったときに精神的な乏しさみたいなことを指しているのか、何か一緒に語られてい

るようなところがある。

- 区の貧困調査もこれからなので、国の相対的貧困率13.9%という数字があるが、区はこれより高いのか。
- 子どもの貧困の目安として、区の就学援助の受給が参考になるが、イコール子どもの貧困とは言い切れないところがある。
- 貧困でないような方も就学援助を貰っているが、例としてあがっているのは個人的にはレアケースではないかと捉えている。
- 前期も子どもの貧困の定義について議論したが、結果として経済的に厳しい親子の状況もあるが、親の年収では計れない事例もあり、裕福な家庭であっても関わりにおいては非常に貧しいことがある。
- 「貧困」という言葉がすごく抵抗感を感じてしまうが、少数派の子どもたちをどうやって救うかという話か、精神的な部分でその育ちを孤立させない、家庭を孤立させないで地域全体でという話が悩んでいる。
- 講師の事例（前期）では、経済的貧困の若者が児童館とつながりながら前向きに生きているというケースがあり、前向きに生きるということを考えたときに何がそうさせるのかと言えば、関係性の豊かさと感じた。
- 経済的貧困と関係性の貧困は相乗効果があると捉え、この2つは別物ではなく絡み合っていると捉えている。
- 27期会議の報告書では、複合的剥奪としての子どもの貧困を図式化したものだが、経済的貧困の裏に隠れているものを見ると、そのコアな部分は実は関係性ではないかということにたどり着いた。
- 前期の提案、提言の3つの方向性の具体化は確かに検討していくべきかと思うが、子どもたちにつながっていないというところの具体性を考えるのは非常に重要と考える。
- 「どんな状況にあっても生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境のあり方」というサブタイトルがあるが、やはり一部の子ども話ではなく、区の子どもみんなが自己肯定感を持って目標を持って生きていけるなど含め話し合えればと感じた。
- 子どもの定義をどこまでにするのか。
- 私が行なっている子ども食堂では、小中高校生までとみなしている。
- 経済的に何でも買い与える家庭で、関係性の薄い子どもは自己主張のために大きな声でその場を収めるということが見られるため、経済性よりも関係性の方が重要ではないかと思う。
- すごく密に関係している子どもは、小さいうちからいろいろなSOSを出したり、この人はどうかなというアンテナがすごく良く張れている。
- 裕福でも意外と囲まれている子どもは関係性がすごく微弱で、この人は大丈夫な大人かそうではない大人かのアンテナの感度が少し悪いような気がする。

第3章 公開ワークショップ「みんなで語ろう！子どもの貧困と関係の豊かさ」（第4回～第6回）

本会議10名の委員で意見交換をしてきたが、現代における子どもの貧困や関係性の貧困が見えにくいこと、また、区としての調査によるデータがないこと等から、今期のテーマである「関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策」の具体化の検討にあたり、会議内においてまとめるよりも、地域で青少年に関わる方々にもこの状況を知っていただくとともに、その上で、活動されている方々の意見や考え、課題などの「現場の声」を参考にすることが施策化に向けて今後の議論に大変重要になってくるのではいかということになり、公開ワークショップを開催することになった。

1 開催趣旨

子どもの貧困は、特に経済面や学習面を通じ、子どもをさまざまな関係性から疎外し、孤立化させる恐れがある。孤立した子どもは、自尊心や自己肯定感を養われることなしに、社会に出されることになる。こうしたことから、社会教育委員の会議では、社会教育的観点からのアプローチとして「関係性の貧困」に着目し、貧困からさまざまな関係や場への参加やつながりから疎外される因果関係とは何か、また課題からどのような環境整備に向けた方策を考えられるのか、地域で子ども・若者に関心のある方々とともに考える。

2 実施概要

○実施日時 平成31年2月24日（日）13：30～17：00

○会場 世田谷区役所第3庁舎3階「ブライトホール」

○対象 区内在住・在勤・在学者

○参加者 44名

○プログラム 第1部 基調報告

社会教育委員の会議の取り組みからの問題提起

「子どもの貧困をめぐる課題－『関係性の貧困』を中心に」

報告者：第28期社会教育委員の会議議長 萩原建次郎

第2部 リレートーク

地域共生のいえ「岡さんのいえTOMO」代表 小池良実氏

せたがや子ども食堂みっと代表 村上由美氏

第3部 ワークショップ

インフォーマルな「共」のつながりを豊かにするために

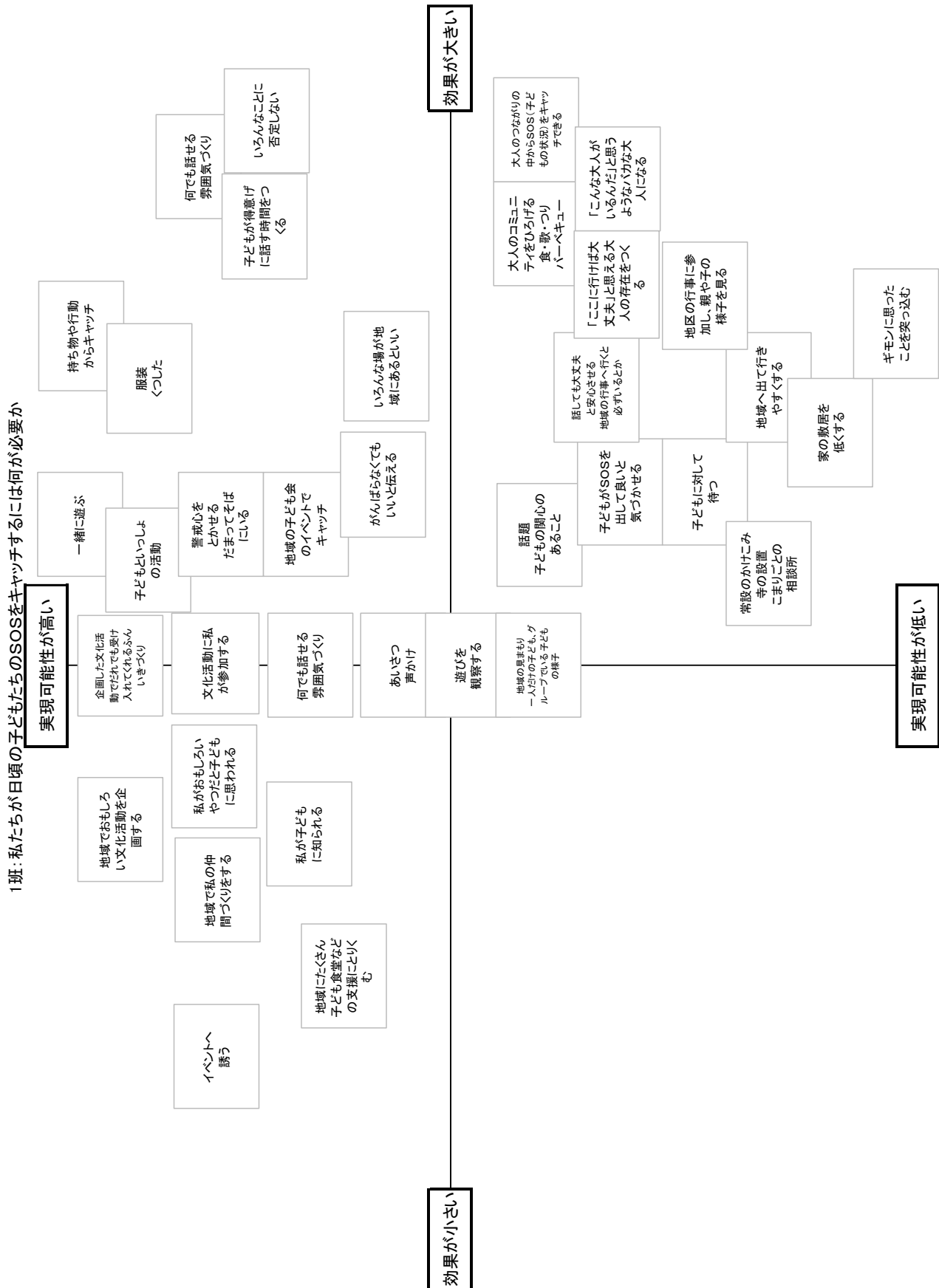
テーマ①「私たちが日頃の子どもたちのSOSをキャッチするには何が必要か」

②「子どもの困難に関心を寄せる者同士がつながり合うには何が必要か」

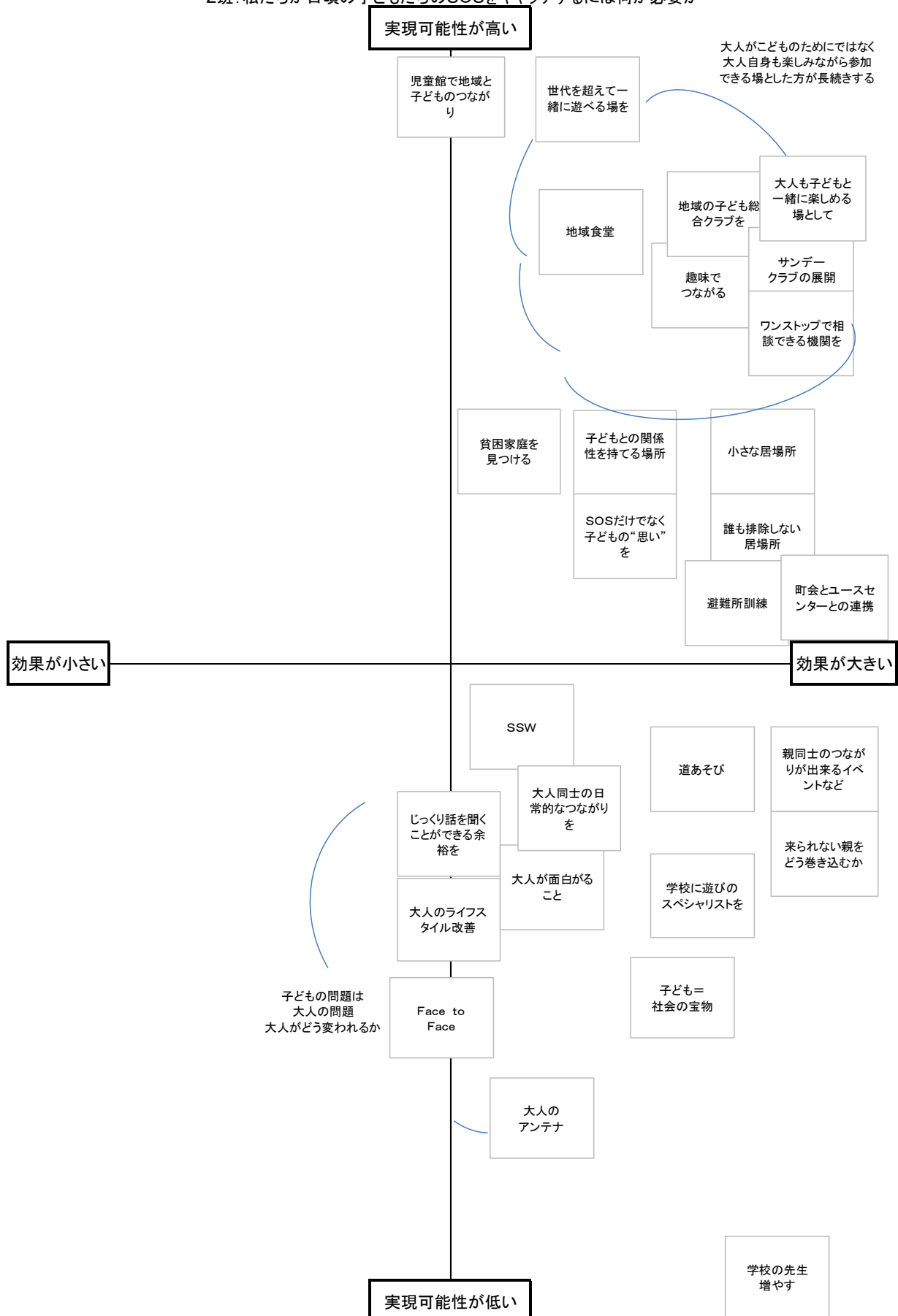
③「私たちが困難を抱える子ども・家庭とつながり合うには何が必要か」

交流とネットワークづくり（自由参加）

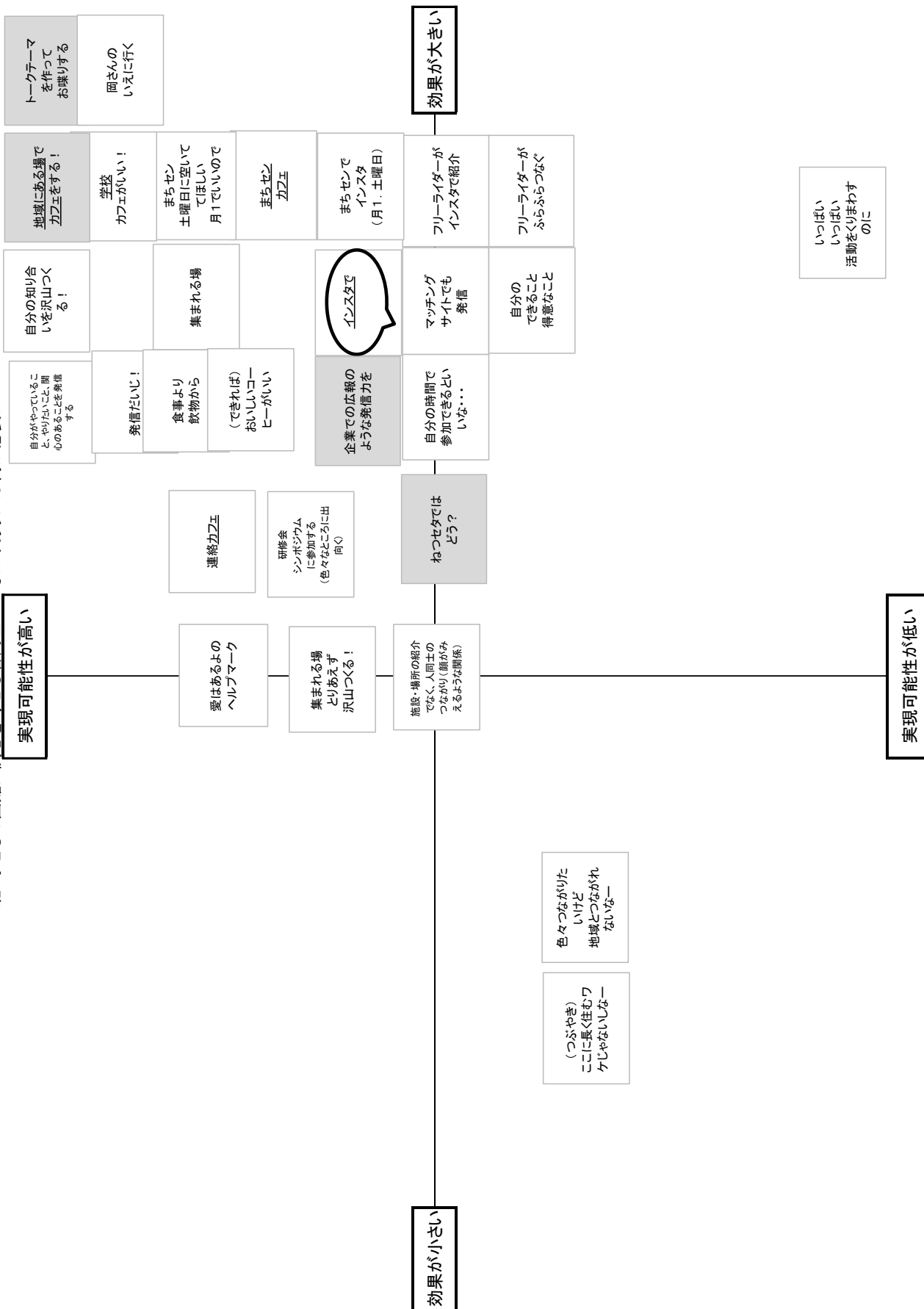
3 各班意見交換図（1～8班）



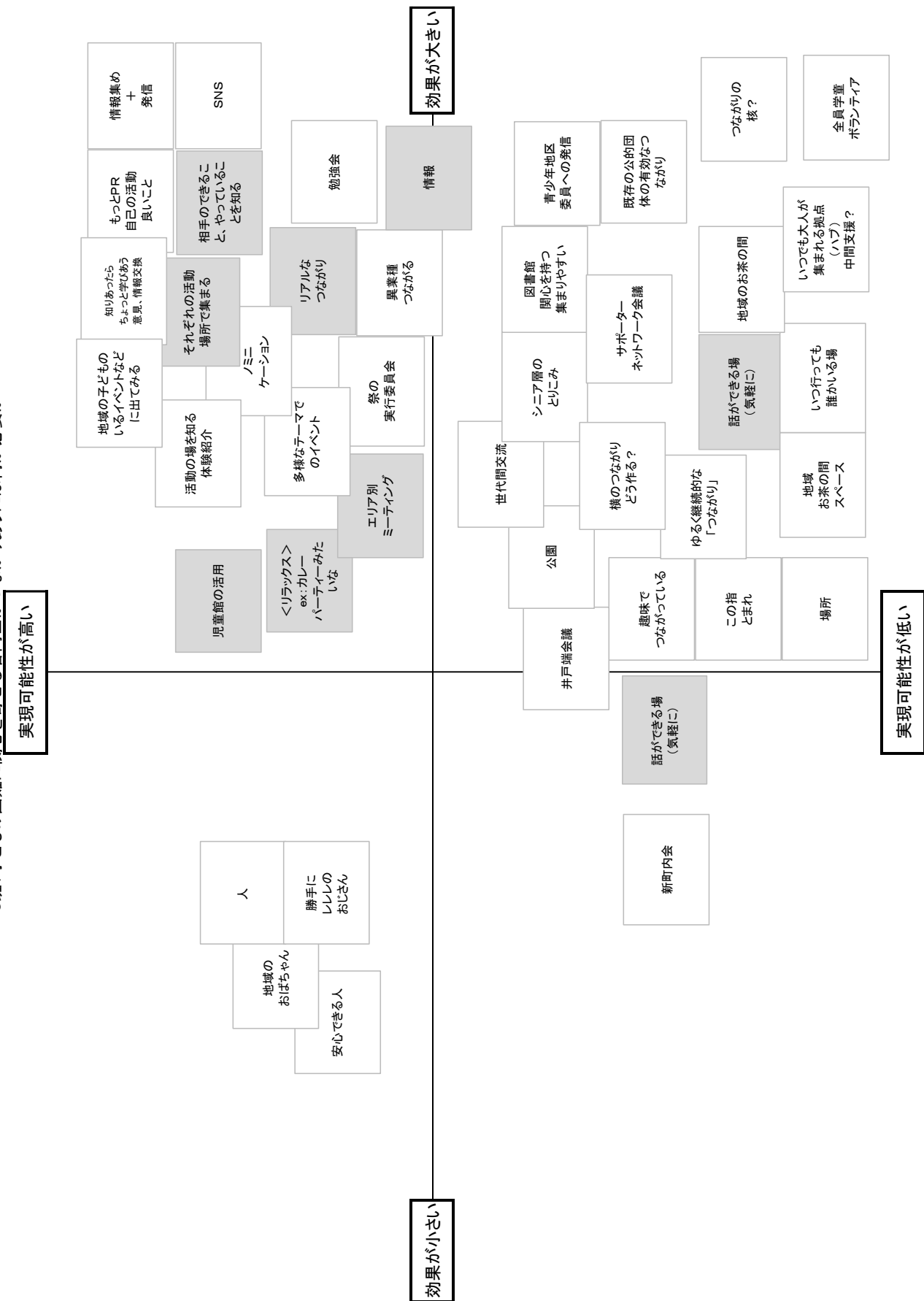
2班: 私たちが日頃の子どもたちのSOSをキャッチするには何が必要か



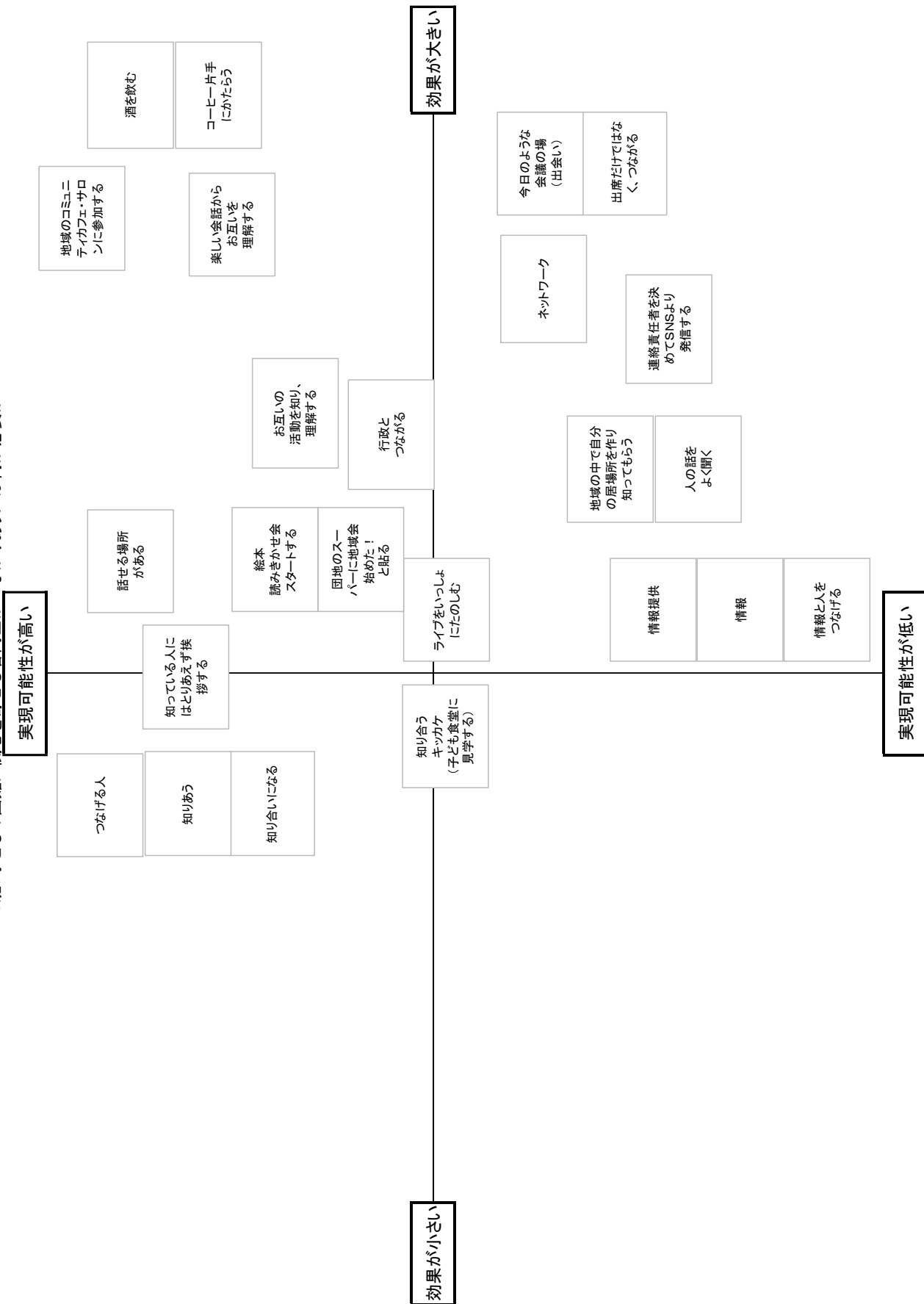
4班：子どもの困難に関心を寄せる者同士がつながりあうには何が必要か



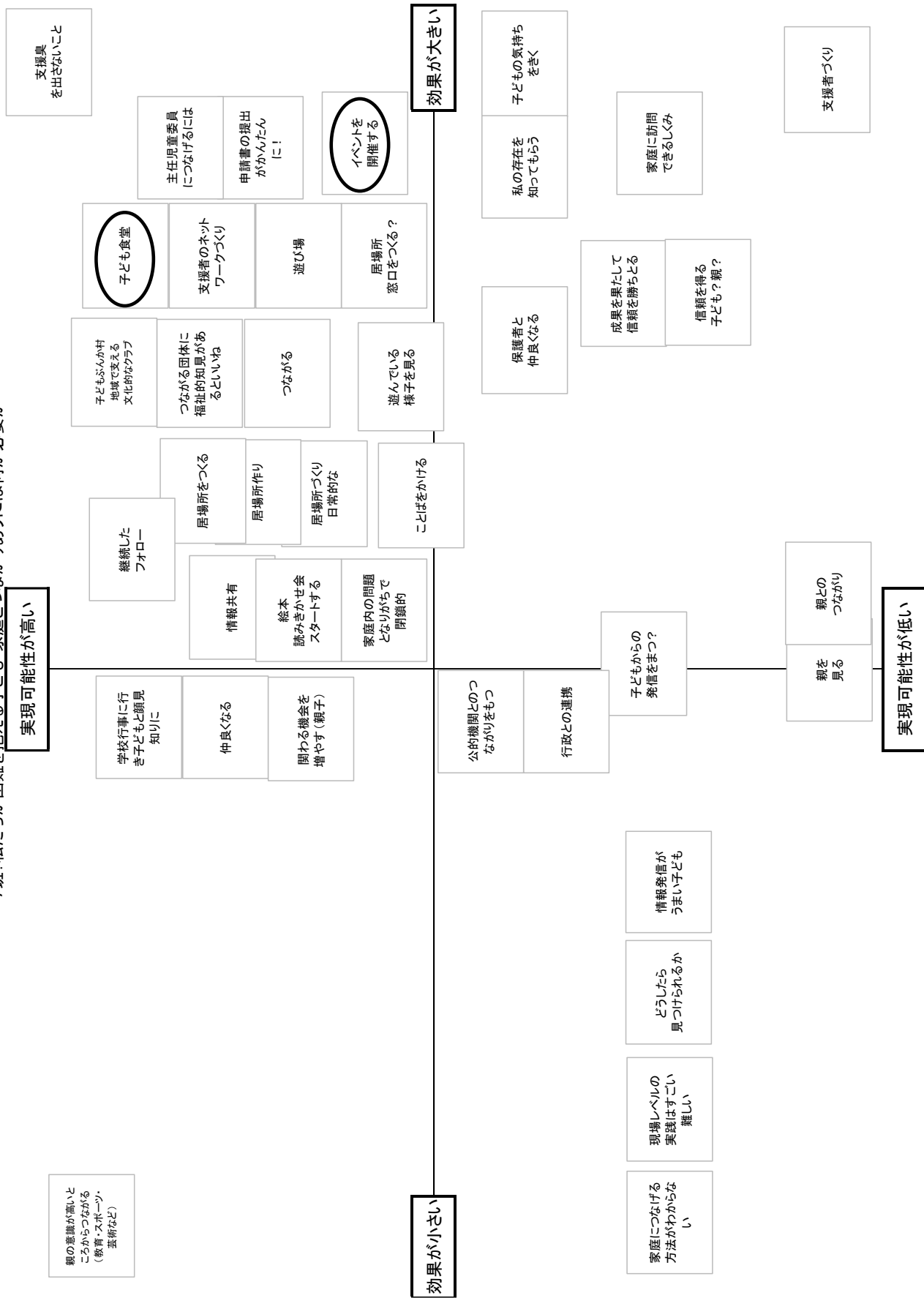
5班：子どもの困難に関心を寄せる者同士がつながりありうには何が必要か



6班：子どもの困難に関心を寄せる者同士がつながりあうには何が必要か

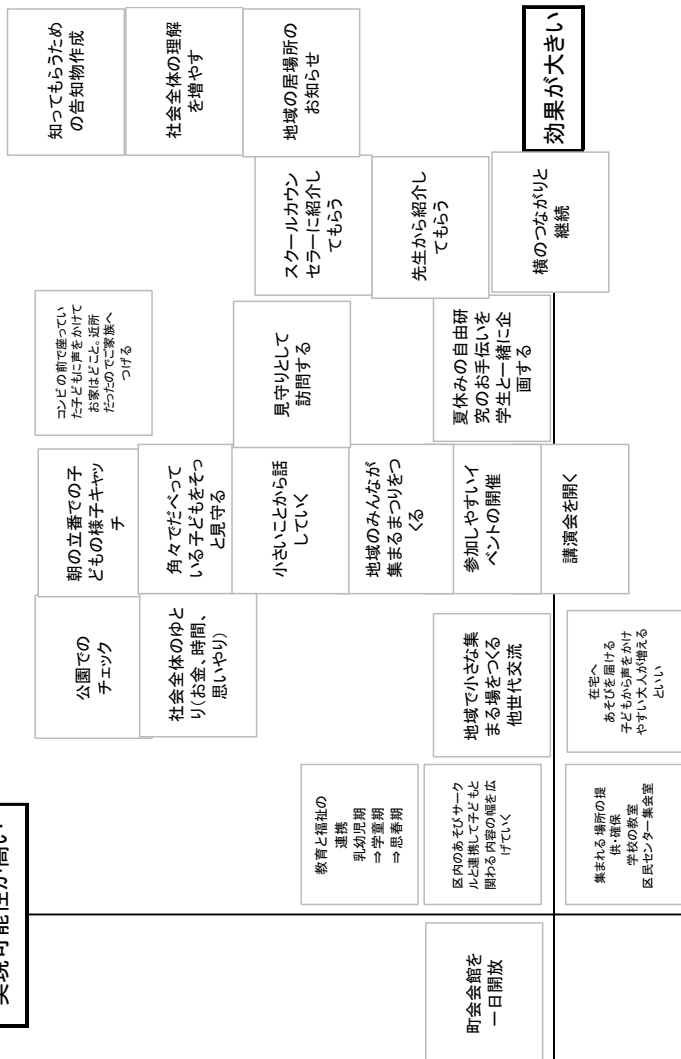


7班：私たちが困難を抱える子ども・家庭とつながりあうには何が必要か



8班：私たちが困難を抱える子ども・家庭とつながりあうには何が必要か

実現可能性が高い



効果が小さい

実現可能性が低い

4 アンケート集計

参加者：44名

回収：35枚 (79.5%)

区内在住：30 在学：0 在勤：4 不明：1

年代：20代 (5) 30代 (4) 40代 (2) 50代 (12) 60代 (9) 70代 (2) 不明 (1)

☐ 参加のきっかけ・動機などあてはまるものに「○」をつけください (複数可)

- ・知人、友人の誘い 23
- ・チラシ 8
- ・区のHP 2
- ・SNS 3
- ・タイトルやテーマに興味・関心 10
- ・子どもの貧困について知りたい 4
- ・ネットワークを広げたい 4
- ・その他 (萩原先生、教育委員会) 3

☐ ワークショップ全体の満足度はいかがですか

- ・大変満足 8
- ・満足 24
- ・やや不満 3
- ・不満 0

☐ ワークショップ等で語りきれなかったことなどをご記入ください

(その他、「子どもの貧困」をめぐる区の施策で実施すべきことがありましたらご記入ください)

○人や場所といった使える社会資源をもっと知ることが出来ればいいと感じた。(20代)

○大人のつながり

⇒若者も地域のつながりを感じずに育った子どもです。20歳を過ぎたからといって、つながり方を知っているわけではないので、何かの「しくみ」でコミュニティの入口に立つ機会があればと思いました。(20代)

○本質的には、社会そのものの変革についても考えなければなりません。社会のどこに課題があり、根本的な解決のためには何が必要なのか、中長期的な展望をもって議論していければと思います。(30代)

○貧困の多様性に問題の焦点を当てていて良いですね。(30代)

○地域社会の中で人のつながりが希薄化するなか、今必要なのは誰も排除せず、多様な人々が出会い関わる場を重層的に仕掛けていくことしかないと思います。「居場所」が縦割化され(子ども/高齢者など)あるいは大規模複合化される中で、地域共生のいえのような小さく多様性に彩られた場を地域に多様につくっていくことが、一層大事になっています。そうした場を通して困難を抱えた子どもが他者とつながり、人々との関係性を編み直す中で困難を抜け出すサポートにつながる、そうした契機となる場が質の担保をされながら増えることを願っています。(30代)

○親や大人、本人が情報の貧困に気づくために、何ができるか。インターネットやSNSで情報が取れていると思っている子どもに、正しい有益な情報を届けられるかどうか考えなければならなと思いました。(40代)

○子ども食堂をやっています。一個人として知った子どもの困難な情報をどうしたらその子の助けにするのか、どこまで動いていいのか悩みます。(50代)

○今、子どもの親となっている年代の人たちへの現在の貧困の意味の説明。(50代)

○子どもは学校に所属しているので、学校、行政、地域とで情報を共有し、できる支援を考える(居場所づくりやサークル等)。守秘義務を守るあまり非常に閉鎖的で、できる支援の実現化ができていないように思う。(50代)

○学校の教室を使用して地域の方による学習支援。(定年で学校を退職された先生方の知識の協力)(50代)

- 子ども若者、多世代交流のできる身近な居場所づくりとそのネットワークの構築。(50代)
- 情報の核としてのサイトSNSは必要だと思いました。11月の若者支援の団体の冊子のサイト化を是非。(50代)
- 問題提示して解決策も知りたいです。(50代)
- 関係性の貧困も重要であるが、経済的貧困を解決することが一番大切だと思います。(やや政治的な話題になりますが)(60代)
- トラスト事業で空き家を活用しているように、地域で関われるとイイですね！(60代)
- 子ども食堂への助成を多くお願いしたいです。(60代)
- 継続と常にウェルカムという大人の姿勢が大事。(70代)
- 子どもは社会の宝。子どもの人権を守る思想を区民に根づかせる施策。子育てに悩む親がSNS通信で相談できるシステム。テレホン、メール、FAXなど(70代)
- 申請書の提出など、もっと簡単にしてほしい。(不明)

□ ご参加してみてご意見・ご感想等ありましたらご記入ください

- 多様な背景をもった方々と交流・意見交換は、とても有意義でした。最後のスモールステップ提案まで話しきれなかったのは、残念でもう少し時間がほしかったなあとと思いました。ファシリテータで入った委員の方の進行のもと、円滑な議論ができました。(20代)
- 同じ思いを持つ方々と知り合う、話し合うことが出来よかった。(20代)
- まずは自分自身がこのような場に出ていくことが大切だと思いました。また、主体的に行動することによって、得られるものが多く、さらに興味が湧きました。また機会があれば参加したいと思います。(20代)
- 初めてで何もわからず緊張しましたが、あたたかく迎え入れて下さりうれしかったです。(20代)
- 子どもの貧困について考え活動している方々がたくさんいることを知れ、つながれたことがとても大きな成果だと思います。いろんな考え、アイデアにふれとても勉強になりました。(20代)
- 色々な話ができて良かったです。(30代)
- この短時間で結論を出すのは難しい。それぞれの前提条件が違うので、まずそのすり合わせが難しいと思った。(30代)
- かけ足のスケジュールでしたが、とても充実した時間でした。(30代)
- 途中からの参加でしたが、とても関心高い内容でした。またこのような機会がございましたら、出席したいと思います。(40代)
- 色々な情報を知れてよかった。ワークショップの時間が短く、消化不良でした。(50代)
- 子どもの貧困について知っていても、なかなか個人では動けないと思っていました。事例も含め、私にもできることを探してみたいと思いました。(50代)
- 大変、活発な会だったと思う。(50代)
- 経済的だけでなく、現代においては心の貧困の方が重要であるとも思った。大変勉強になった。(50代)
- 今日は、大変勉強になりました。自分で思っていた貧困とは意味が違い、より身近な問題として捉えることができました。ありがとうございます。難しいかもしれませんが、この問題を親世代にももっと知ってもらい、我が子だけではなく、まわりの子どもにも目を向けてもらえたら嬉しいです。また、NPOやボランティアだけでは限界があるので、自治体等の連携と組織改革をお願いしたいです。(50代)
- 色々な考え方を聞けてよかった。(50代)

- いろんな立場の方が、同じテーマで考え話し合うことはとても面白かった。どう実現していくのか地域で考えたい。(50代)
- とても楽しく学びました。(50代)
- 様々な活動をしている方々とディスカッション、交流ができて大変有意義でした。(50代)
- いつも思うのは、現状の説明がありとても役に立つのですが、ここから今後、具体的に私たちは何をしたら良いのか、結局、何もできないまま、終わってしまうのが残念です。できればやりわりと提示していただきたかったです。具体的なアイデアがうかばない。地域で関わる人はみな同じ共通な人なんだーと実感します。(50代)
- テーマが決まっているので、自由な意見交換ができなかった。事前にテーマを示しておくとういと思います。(60代)
- 活発なワークショップ、楽しかったです。(60代)
- 貧困を考えるひとつのキッカケになりました。ありがとうございました。(60代)
- 子どもへの熱い思いをもっている方が多いと感じました。(60代)
- 基調報告、リレートークで「子どもの貧困」について整理してお話いただけて、大変勉強になりました。地域の方々の“エネルギー”がすばらしいと思いました。ありがとうございました。(60代)
- 社会教育委員の会議の活動を全く知りませんでしたので、知ることができてよかったです。(60代)
- 色々なサークルで活躍されている人の意見が聞けて良かった。参考にしていきたい。(60代)
- 若い人と話ができて楽しかったです。実現できそうなアイデアも出ました。(60代)
- 難しいテーマだが、一步一步進める気がした。“地域からまず”と思った。(70代)
- ここに、当事者が発信してくれるといいと思いました。(70代)
- 子どもに最も近い現場の人たちの参加が少ないように感じた。もったいない！世田谷区が「貧困」についてどうしていくのかを行政のやる企画で多くの人と考えないと！または「子どもの貧困」について情報のない人をたくさん呼ぶか。中途半端な会だった。(不明)

□ 今後、社会教育委員の会議で取り上げてほしいテーマやジャンルはありますか

- 子ども若者の社会参加、貧困的アプローチからの子どもの権利保障など (20代)
- 若者の居場所づくり、若者支援 (20代)
- 若者のライフプランについて (20代)
- 3 つ目のユースセンターもできた現在だからこそ、政策的な社会的な「子ども」の位置づけについては継続して検討していただければと思います。(30代)
- 社会教育委員って何やっている人ですか？ (30代)
- 意識が高くない人をいかに巻き込んでいくか？について (30代)
- 「共」の世界の充実は、「公」の縮小と表裏一体と考えられがちです。本会議はそうした視点に立たず、「共」の充実と同時に「公」の支援の充実の必要性も十二分に打ち出しておられると思いますが、子どもを支える「公」(制度・行財政)のあり方にも学びを深められればと思います。(30代)
- 学校、地域、行政とつながれる人の構築。(50代)
- 学級崩壊などの対処の仕方。(50代)
- 不登校になる子ども(子どものうつ病対応)
- 子どもとネットの関わり方、実態と対応。(50代)

○貧困とネグレクト、いじめ、不登校など。(60代)

○児童虐待、犯罪。(60代)

○メディアリテラシー (70代)

○子どもを育てることの楽しさなど、親がもてるようにするとはなど。(70代)

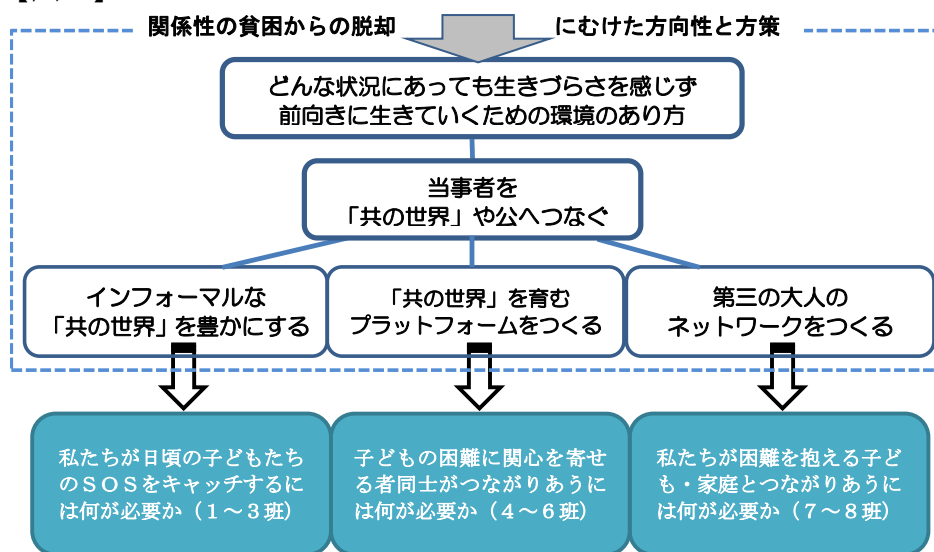
第4章「関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策」の具現化（第7回～第11回）

1 課題抽出・整理

公開ワークショップの3つのテーマは、前期の提言で示した3つの方策に対応した問いであり、それを構図にしたものが図3である。

図3をもとにワークショップによっていただいたご意見から、特に各班意見交換図の縦軸の「実現可能性が高い」と横軸の「効果が大きい」の部分を中心に、教育行政への政策提言になり得るものを抽出するために、市民主体で行なうもの（共の世界）と行政課題として取り組むべきもの（公の世界）を整理した。

【図3】



（1）私たちが日頃の子どもたちのSOSをキャッチするために何が必要か

市民主体（共の世界）	行政課題（公の世界）
声かけに対する子どもたちの反応がどうであるかというのを見極めるのが一番大切だと思う。今、あいさつ運動を主体に子どもたちに声かけをし、その反応をキャッチする。そのキャッチする内容をどう受け止めてどう対処するか。そして、その対処の仕方をいろんなものをどこにつなげていくかが次の問題になってくると思う。	そこで、行政課題の1つとしてコーディネート機能が必要だと思う。つまり、SOSで受け止めたものを解決できないものをどうつなげていくかで受け止めるのが、公としてのコーディネート機能であると思う。その対策組織としては、例えば学校、児童館、少年センター、児童相談所、青少年委員、子育て支援センターなどの核となる方がそういう組織をつくる。
	「児童館に来る子どもの様子を聞く」「学童やBOPでの子どもの様子を聞く」「図書館カフェ」「放課後子どもの集まれる場」「空き家 店」と書いてあるが、本当は自分も含めて関わっていきたいが、自分一人だけというのは難しいので、いろんな人をつなぐのはやはり行政でないと難しいと感じた。

埼玉県のある小学校では、登下校時間に地域のシルバー人材センターの方だと思うが、結構な人数が集まって、子どもたちが出てくる動線に立って声がけをしている。行政が前面に出ず、学校とうまく連携した取組みだと思う。	地域の方々の力を借りながら、コーディネートを行政がバックアップする。
子どもの思いを受け止めるとか、いろんな会話の中で出てくる困り事をフォローできる場所があったらいいという意見があった。いろんな世代が集まれるような場所としてカフェや駄菓子屋さんなど、大人がいるけれど、子どものたくさんいる中で情報がぼろっと漏れたりとか、いろんなところで場所が必要だと思う。	ぼろっと漏れた情報を行政につなげたりしていけたらいいのでは。
学校に比較的に近いが、学校の中ではないようなところがベストではという話があり、例えば「空き家」など。	学校の中でもクラスは居心地が悪いと感じている子どもを保健室が結構受け入れている。保健の先生の力という気がする。自分の思いを吐き出せる気がする。
子どもの悩みやストレスは、その受け取り方ですごく違うと思う。多世代交流として、昔の経験値や捉え方が違ういろんな世代が一緒にいる雰囲気を再現できる場所があったらいい。そこへ行けば誰かがいる、居心地がいい、リラックスできるという、「共の世界」である。	保健室は、子どもが一番話しやすく、SOSのときは身体的に具合が悪くなると思うので、保健の先生だけで止まらないで次につなげるという意味では、学校に通っている子どもからのキャッチは有効だと思う。
場とか箱の話になるが、一番大切なのはそこに行けない子どもをどうするかなので、ハードよりもソフトで、やはり大人が声をかけその反応を見るというその雰囲気が大事だと思う。	公はそれをコーディネートやバックアップする。公的組織として既に子どもに関わる地域懇談会や情報交換会などあるが、全体的にコーディネートできる組織であれば、「共の世界」でも活動が更にしやすくなる気がする。
「おはよう」と声をかけると、あいさつをする小学生も中学生もいるが、黙っていく子どももいる。また服装も見て、今日は普段と違うなど、そういうものをいかにキャッチするか、あるいは周りの大人がそういう意識とか、目で見ていることが大事だと思う。	行政はそれをどう啓発するかという方が効果があるのではないかと思う。
「場」というのを実際の場と考えるのか。いわゆるインターネット上の場と考えて、そこから実際の場につなげる、逆に実際の場で見えた子どもはインターネット上の場につなげていく。実際に外に行くのはハードルが高いので、同じ場だけれど、空間上にある場を設けてあげるというのがこれからは必要だと思う。	

(2) 子どもの困難に関心を寄せる者同士がつながり合うには何が必要か

市民主体（共の世界）	行政課題（公の世界）
どの班にも出ているのは「カフェ」。気軽に集まれるという意味で、キーワードだと感じた。	スタートの部分はある程度行政がイニシアティブをとらなきゃいけない。「まちセンカフェ」や「児童館カフェ」など、公の力が必要かと思う。運営は共の力が重要になってくるかと感じた。
公の場所の提供ではなく、まちの喫茶店など、もっと気軽にお茶を飲みながらやりたいという意見は出ていた。	
例えば喫茶店とタイアップして、2時間は関心を寄せる人たちの話ができるような場所があってもいいと思った。	
もう一步踏み込んで、地域には様々な活動をされている人がいるので、話の得意な方、発信力のある方など、アイコン的な人をSNSで発信しながらトークテーマに絞ってカフェをやっていく。このように、 いろんな活動をしている人が混ぜこぜになって、垣根を越えた仲間づくりができる仕組み をつくっていったらと思う。	お互いの垣根を越えた仲間づくり、そういうつながりはまさに第三の大人のネットワーク ということなので、行政にできることは広報（発信元）である。
喫茶店だけではなく、いろんな場所があっていいと思う。例えば「学校カフェ」「児童館カフェ」があったり、お店があったりと、区内にいくつかあれば、トークテーマに興味があっていく人もいれば、場所がいいと思っていく人もいるので、結果的にそういう人たちが つながり合える場所 というのがあったらいいのかと思う。	
SOSをキャッチするために、子どもが「場」に出向くというのはハードルが高いと思うので、大人が学校に行く。公開授業や学校のイベントに何度も行って顔見知りになって、キャッチするのもありだと思う。そうなれば、大人も学校に行く機会やチャンネルがあるということが必要。	学校にはいろんな制約があるので、やるならまちセンカフェからスタートしてはいいか。まちセンには、普段から子どもと接点のある人が出入りしているので、情報を集約することはできると思う。
子どもがどこかに出かけていくのは、やはりハードルが高いと思う。知らない人のところに行って打ち明けられるのかと。何が必要かと言えば、大人の側のカウンセリングマインドだと思う。	
子どものことに関心を寄せると言っても、いろんな考えやタイプの人がいる。基本はやはり子どもの話を聞こうとする人たちがいなかったら、子どもは多分話さないと思う。	行政的な方策としては、研修などが有効だと思う。

子どものSOSをキャッチするには、全く知らない大人がキャッチするのは難しいが、身近な親なら意外とキャッチできるのではないかなと思うので、入口として保護者も視野に入れておくことも必要だと思う。	
関心はなかったが、カフェにつられて関心が出てくることもあるので、そういう大人が多くなれば子どもにとっても幸せである。やはり、場、集い、口コミ等で関心を寄せる人が関心のない人を1人連れてくることで、静かな広がりができるばいいと思う。お酒が入ればもっといいかも。	
子どもたちのSOSは、年齢の近い人、例えば中高生なら大学生ぐらいの人から救われることもあるので、多世代で幅広くつながれる場があったらいいと思った。	

(3) 私たちが困難を抱える子ども・家庭とつながり合うには何が必要か

市民主体（共の世界）	行政課題（公の世界）
子ども食堂でよくあることだが、子どもは行きたいが親が出したがらず、子どもと親の意思が違い、結局来られないケースがある。安全性のこともあり、子どもだけ出すわけにいかないの、対応に苦慮しているところがある。	親のニーズに左右されない形で子どもが関われる機会とか場をつくるということでは、学校は子どもにとっては延長線上でもあるので、学校若しくはそこに近い場は子どもにとって行きやすい場であるため、1つの方策としては学校との連携は非常に欠かせない部分に思う。
食べるものでつながるのはすごく有効だと思う。ただ学校内だと、困っている子どもはそこからどこへ行ったらいいの。親も行政の窓口はハードルが高いので、食でつなぎ自立支援できる場があるとすごく有効だと思う。	学校現場は、働き方改革に伴い教員の勤務時間の削減が大命題であるため、学校で新たなものを行う際にコーディネートをする者を出すのは非常に難しい問題がある。
子どもの貧困と子ども食堂はあまり結び付けられない方がいいと思う。運営されている人の話を聞くと、本当に来てほしい子どもは来てくれない。子どもの貧困から離れて、同じ人間同士つながっているというコンセプトでやっていけばいいと思う。	家庭や子どもとつながるには、コーディネートする人が必要である。区の施策も多くあるが、それが当事者たちに本当に届いていないのが現実ではないか。ここに行けば何でもつないでくれる、相談に乗ってくれる「ワンストップ」の場が必要だと思う。
「共」の考え方からすれば、子ども食堂は食を通じたコミュニティづくりを基本に、その中で勉強を教えたり、一緒に遊んだりすることが大事だと思う。	行政はそれを支援するしかないと思う。具体的には啓発活動で、子ども食堂に対する理解を得るためのPR活動や実態調査など、地域ごとに開いていくことが考えられる。
子どもの食堂に来ている子の8割はお母さんが忙しいとのことで貧困ではない。逆に貧困の人ほど子ども食堂は「貧困」だという思い込みがあって、そこに掬われる。啓発をすればその部分で、うまいアプローチを考えていきたい。	子どもの貧困を前に出さない形で啓発しないと、貧困と結びつけるとそれがラベリングになるため、子どもの貧困は裏テーマでどんな啓発をすればいいのか。

非常にデリケートで、当事者からするとそういうふうに見られることに対してものすごく敏感だと思う。そういうことを考えると、啓発も方法が非常に難しい。	
子どもたちが集える企画をスキルのある方たちが開催するのが一番で、PRの仕方は「そこ行くとこんなことがありますよ」、その中にはどこかにつながることも含めて多機能的な場所を提供する。そして、 関心を寄せる人や児童委員などが手伝うとキャッチできるものがある かと思う。	実際に、野毛青少年交流センターでは毎週火曜日は「カレー曜日」といって、子ども若者が一緒にカレーをつくって食べる会を開催している。中にスクールソーシャルワーカーをされている方も時々サポートに入っているので、場があればそういうことはできるのではないかな。
子どもからある場所へ出ていくというのが、なかなか大変な部分もあるということで、なんとか学校の延長線上に何かワンストップできるところというのが、大事な視点として出てきた。	
横浜市の事例では、全てではないが小中学校の中に「コミュニティハウス」があり、そこに地域の大人が入って活動しながら子どもたちがそこに寄ることもできる。	今度、松原小学校は複合施設になるが、学校の横にまちセンとあんしんすこやかセンターがある。そういう施設であれば、世田谷区でも可能性としてはある。
子どもたちにとっては、一つの延長線上、行きなれている場所でもある。行くと地域の方が別の形で関われるという一つの可能性がある。	放課後子ども教室も基本は、学校とは異なる組織が管轄をしているので、空間は同じではあるが、先生方には負担をかけない形での方法はすでにでき上がっている。子どもたちにとっては、一つの延長線上、行きなれている場所でもある。行くと地域の方が別の形で関われるという一つの可能性がある。
一つの方法として、総合型スポーツクラブは学習ではないが、スポーツと文化の趣味を通じて地域が学校を使ってやっている。完全に運営は別組織だが、ここをうまく活用すればとも思う。	最近、インターネットを活用した高校や通信制高校への進学は多くなっている。人との関わりを避ける子どもや家庭も増えているという実感もあって、無理やり引き出すというのはなかなか困難なので、そういう家庭や子どもに対する場が必要ではないかと感じている。

2 一提言ー 第三の大人・若者の発掘とネットワークづくりに向けた仕組み

「1」で整理したものを中心に議論を重ねた結果、「関心を寄せる者*同士がつながることで、子どものSOSをキャッチすることができ、困難を抱える当事者とつながることができる」とし、それには、「関心を寄せる者同士をつなげるきっかけとして、社会教育行政の専門職*によるコーディネーターとしての役割や仕掛けが必要」であるということが見えてきた。これは、区内には様々な活動をしている方々がいるが、まだ「点」であり、「線」や「面」になっておらず、SOSをキャッチできる現状に至っていないからである。

本会議では、社会教育行政の専門職より第三の大人と子どもたちに身近な存在としての若者の新規発掘とネットワークをつくり、インフォーマルな共を豊かにすることで、地域の核となるような方々が集まるプラットフォームが形成され、そこで得た情報とこれまでの経験を発揮しながら、それぞれのエリアで困難を抱える当事者に近い形で第三の大人・若者が関わることでSOSをキャッチしていくことが重要であると結論づけた。

以下は、そのための教育施策として、社会教育行政の専門職によるコーディネートや仕掛けから第三の大人・若者の発掘と顔の見えるネットワークづくりに向けた仕組みを提言する。

*「関心を寄せる者」とは、親でも教師でもない地域で子ども若者に関わる活動をしている第三の大人・若者、または活動はしていないが、第三の大人になり得る大人・若者を指す。

*「社会教育行政の専門職」とは、社会教育行政の中核を担う専門職である社会教育主事や社会教育指導員を指す（詳細はP41を参照）。

(1) 方策の柱1 第三の大人・若者の発掘と顔の見えるネットワークづくり

子どものSOSをキャッチするには、困難を抱えている子ども自らが「場」に出向くということは非常にハードルが高く、知らない人のところに行き打ち明けることは早々ない。また、子どものSOSは、大人よりも年齢に近い高校生や大学生などの若者世代から救われることもあるため、これからは第三の大人のみならず若者世代をいかに発掘するかが重要である。だからこそ、子どもたちが行きなれている学校の延長線上にある場を創出し、子どもたちに関わる大人や若者がそのような場に行く機会やチャンネルをつくるとともに、その場所で出会った大人や若者がつながり合える仕組みづくりが重要である。

方策案①「学校カフェや地域サロンの開催」

○ 地域を巻き込む学校カフェを通した第三の大人・若者（ユースサポーター）の発掘とネットワーク

近年、学校の敷地内にまちづくりセンター等が設置されるところが少しずつ増えており、学校という場だからこそ、地域の人が行きやすかったり、複合施設のため、子どもがいなくてもちょっと行ってみようという気になる。また、おしゃべりする場の設定が必要で、答えのない課題や話題の方が面白く時間を決めて開設する。カフェ内では、学習できるスペースを設けるが、そこで教えるのは年がかけ離れた大人だけではなく、なるべく年齢の近い大人や若者にスタッフとして

参加するとともに、カフェやサロンに関わる横のつながりを構築する。

○ **第三の大人の核となる人材発掘のためのまちづくりセンターカフェの開催**

社会教育には、共の核となる人材発掘やポイントになる人物を発掘することがとても大切である。なぜならまちづくりセンターは地域の人材情報を多く持っているため、この情報を活用しない手はないので、まちづくりセンター内に幅広い人材が集まるイベントやカフェを開設する。

○ **身近で行きやすい施設でのカフェやサロンの開催**

区内には、学校やまちづくりセンターのほかに、地区会館など区民に身近な施設があるため、区民が行きやすい施設を抽出し、興味関心のあるテーマを企画してカフェやサロンを開催する。

【社会教育行政の専門職の役割】

- カフェの意味を広く伝えて、人を集めて集いの場を設け、集まったメンバーでどう運営していくか話し合うことで実際に開催する。その際、そこまでの段取りのサポート、ネットワーク会議やスタッフ等の勉強会などのサポートをする。
- ネットワークをつくるために、参加した子どもや大人・若者がイベントなどを企画することで、カフェの推進力となり、そこから「第三の大人・若者」が発掘されるため、それぞれがやりたいことを募集できる話し合いの場など、ネットワークキングの仕組みを考える。
- 地域の人材情報を持っているまちづくりセンター職員と連携しながら、カフェに関わるボランティアな人材や核となり得る人材を抽出し、ネットワーク会議の開催や関係性の貧困に関する協議などを行なうためのイニシアティブをとる。
- カフェやサロンに集まった大人や若者をカフェの運営や、子どもたちに勉強を教えるなどのスタッフとしてつながれるよう、「第三の大人・若者」を発掘する。
- 東京都の取組みで、学校との連携による高齢者の社会参加促進事業「Tokyo スクール・コミュニティ・プロジェクト」を参考に、アクティブシニアを上手に活用するための仕掛けを考える。

方策案②「講演会・養成講座・ワークショップの開催」

○ **講演会や養成講座の開催と第三の大人・若者（ユースサポーター）の発掘のための新規活動**

方策案①では、カフェやサロンなどに第三の大人や、これから第三の大人になり得る若者が集まりつながりあうための仕掛けを提案したが、方策案②ではさらに第三の大人と若者の発掘と育成に向けた新規活動について提案する。

・ **大人対象のイベント開催と第三の大人の発掘とネットワークづくり**

第三の大人を発掘し、ネットワークをつくるための仕掛けとして、地域で活動している核となる方々に関心がありそうな方を誘い、例えば、子ども・若者の声を尊重する社会に向けてというコンセプトで、「子ども・若者のアドボカシー（子ども・若者の声を聞く）」という講演会を開催する。また、継続的なつながり合いや支え合うために、講演会終了後は、学習会やアドボケイト養成講座につなげていく。さらには事例検討会などに発展させ、従来の活動枠を超えた交流によって「第三の大人」の発掘とネットワークにつなげていく。

・ **若者対象のイベント開催と第三の若者（ユースサポーター）の発掘と育成**

若者を対象に世界的に広がりを見せているSDGs（持続可能な開発目標）を使い、「2030年持続可能な未来のために―誰も置き去りにしない社会を考える（仮題）」というイベントを開催する。このイベントの目的は、中学生から39歳までの若者を対象に豊かな「共の世界」を体験し、活動を通して困難な状況にある子どもの発見に伴い、「第三の大人」となり得る若者の発掘と育成である。具体的には、ファシリテーターを学識経験者などに依頼し、グループディスカッションやワークショップなどを取り入れて、参加者に自由な意見を出してもらい交流を図る。また、このようなイベントを継続的に開催し、必要に応じて地域で若者支援活動をしている団体や個人に関わってもらいが、具体的な取り組みのまとめは中学校とも連携して特別授業等でワークや発表などを企画する。

○ 地域ごとによる複数回のワークショップ

第6回に開催したワークショップでは、たくさんの関心のある方に集まっていたが、さまざまな知恵をいただくことができたため、「第三の大人・若者」の発掘やネットワークを目的に支所単位など地域ごとで開催する。また、地域の中には子どもに関わる方がたくさんおり、普段から交流があるのでそういう方の力を借りて、継続的に複数回のワークショップを開催する。

○ 子育てを介したネットワークづくり

現在、働いている夫婦が大変多いえに子育てに悩んでいる親も多忙で、親同士が気軽に話ができる場所や機会がなかったり、つながっていないことがある。特に子育て中の親は、いろいろなことに気になりながらも実は聞けないというところがあって、ネットで調べて子育てをしている方も多いと思うので、地域や社会で子どもを育てるという観点からすると、子育て中の親を対象に関心のあるテーマでカフェやサロンを開催する。

○ 保護者がつながる企画の開催

中学生の子を持つ親は、なかなか学校に行き難いことがあるが、親の関心のあるテーマを決めてそれに沿って親同士が話し合いつながり合えることが重要であるため、社会教育指導員や社会教育主事が学校との間に入りコーディネートし、各校の実情にあった保護者がつながる企画を開催する。

【社会教育行政の専門職の役割】

- 講演会や養成講座の開催と第三の大人の発掘のための新規活動が円滑に行なわれるように助言やサポートをする。
- イベントの告知やファシリテーターの依頼のほかに、異年齢の活発な交流と若者自ら運営して楽しい場となるように、サポート役として関わる。
- ワークショップの仕掛けを担うとともに、学校や地域、行政のパイプ役として関わる。
- 各学校の実情に合ったテーマを企画するため、学校や保護者との連携を図りコーディネートする。
- 社会教育主事などの行政支援、そして民間の持っているノウハウと子ども・若者、当事者目線のアイデアの3つを掛け合わせた仕組みを創出する。

(2) 方策の柱2 つながれない子どものケア

世田谷区では、先述したように「子どもの生活実態調査」の報告から、推定ではあるが約1万2千人の生活困難層の子どもがいて示された。子どもの貧困対策のひとつには子どもたちの学力を上げるということが必要であり、地域に学習支援や居場所となる寺子屋などの場が求められている。しかしながら、関係性の貧困の視点で考えれば、生活困難層の子どもや学校に行けない子どもに対して、みんなが気軽に集まれる場に引っ張り出すようなことは困難である。

また、今年度から区立中学校では、生徒一人にIDとパスワードが与えられ、5教科に関してインターネットを通じてどこからでもパソコンやタブレットを使って自由に学習できるeラーニングが開始された。非常にいいシステムではあるが、自宅にそういう環境が整っていない家庭もあり、その生徒に学校でやらせることも難しい現状がある。このようなことから、「つながれない子どものケア」の方策が求められる。

方策案①「ネットにつながる学習支援」

例えば、まちづくりセンターや区内の子ども食堂など数箇所にパソコンやタブレットを2、3台設置し、まずはスモールステップとして段階を低くして、自宅に環境が整っていない児童生徒やつながりを持てにくい不登校などの児童生徒を対象に、自分のペースで勉強ができる「ネットにつながる学習支援」の場を創出する。

【社会教育行政の専門職の役割】

- 学習を支援する大学生などの若者や地域の大人の募集や関わる支援者のつながりづくりのためのコーディネートをする。
- 学校になかなか行けない保護者は、学校の持っている情報を知らないことが多々あるので、そのような保護者がつながりあえるような場を設定する。
- 「学習支援」×「カフェ」、「遊び」×「カフェ」などの仕掛けと、その場に参加する子どもたちの声を聞きながら大人も若者も一緒につくり、新たなものを開拓する視点と仕組みの活用が必要である。
- また、ある程度軌道に乗るまでは、「伴走」しながら丁寧かつ継続的にバックアップや支援を行っていく。
- 行政の縦割りのなところを横断的につなげていく役割、いわゆる他の所管や機関など多様な主体をつなぐ「ハブ」としての機能を発揮するが、積極的につなげていくという発信力も必要である。

おわりに－問題解決の分水嶺－

第 28 期の会議は、前期（第 27 期）のテーマを引き継いで、「子どもの貧困に対しての社会教育的アプローチ」について、より具体的な方策の検討を行ってきた。これは前期（第 27 期）の議論が世田谷区における子どもの貧困対策についての、中長期的展望を示したものととどまったためであった（第 27 期報告書参照）。

すでに前期（第 27 期）で世田谷区における子どもの貧困についての捉え方は示され、今後のアプローチの方向性も明確化されていたため、あとは具体的な施策化に向けて意見を出し合あうことに集中すればよい。今期のスタート当初はそうした見通しであった。ところが実際は、子どもの貧困問題をめぐって、一からのスタートを余儀なくされた。それはなぜか。

委員構成が半数近く入れ替わる中で、「そもそも世田谷区に貧困はあるのか?」「あったとしてもそれはレアケースに過ぎず、広く一般の子どもたちの施策につながらないのではないか。」「世田谷区はすでに就学援助制度があるので貧困は存在しない」といった指摘に始まり、再び一から世田谷区での子どもの貧困をどうとらえるのか、そもそも現代における貧困問題とは何が問題なのかに時間を割くことから始めざるを得なかったからである。

そのような状況の中、昨年夏、区内の小中学生とその保護者を対象とした大規模な生活実態調査結果が公開され、区内の子どもの貧困割合が 10 人に 1 人に及んでいることが明らかとなった。全国平均が 7 人に 1 人とされる中で、それは決して低い数値ではないものであった。また、調査を受託分析に当たった首都大学東京の阿部彩氏からは、世田谷区の場合、子どもの貧困が他自治体に比して一層見えにくく、ハイリスクであることが指摘された。それは他区に比べて高所得の世帯が多い世田谷区にあって、貧困層の家庭は周囲にそれを悟られまいとふるまう傾向にあること、周囲も「世田谷区に限って貧困は存在するはずはない」と思い込む傾向にあるからだそうだ。すでに前期報告書においても、住民・区民同士が互いの顔を知らず、関心も薄く、身近に SOS を出せる誰かがいない、関係性の貧困こそが問題の根底にある、ととらえていた。そのことと合致する指摘であった。

いまふりかえれば、今期の会議の状況もまた、現在の世田谷区の子どもの貧困をめぐる問題状況を象徴していた。そうした状況を放置したらどうなるか。ただ経済支援や各種サービスを充実させて行政が「提供」すればいいのだろうか。

世田谷区のように、地域課題・社会課題が顕在化しにくい場合、とりわけ公的社会教育が機能しているか否か問題解決の分水嶺となる。なぜなら、公的社会教育は、社会教育主事・社会教育指導員が地域を歩き、住民・区民の声なき声に耳を傾け、地域課題として掴み、学習課題として顕在化させ、広く区民に学びの機会を生み出すことが使命であるからだ。さらに彼らは、区民・住民の学習支援を通して、人々の様々なボランティア活動（サークル活動）を創出し、横につなぐことで、生きて働く地域づくりを支援するコーディネーターとして期待されている専門職でもある。東京都内では最も多くの社会教育主事と社会教育指導員を抱えている世田谷区はどうか? この 8 年間、社会教育委員として関わってみても、その実態は全く見えてこない。来期の委員会では、区社会教育主事・社会教育指導員の業務実態が検証され、本来あるべき社会教育が機能するよう、実効性のある提言がなされることを期待したい。

第 28 期社会教育委員の会議 議長 萩原建次郎

資料

- ☐ 資料1 意見交換図
- ☐ 資料2 現代的貧困の共通理解に向けたメモ
- ☐ 資料3 公開ワークショップチラシ
- ☐ 資料4 第三の大人の発掘とネットワークづくりに向けた仕組み案
- ☐ 資料5 社会教育主事・社会教育指導員に期待される役割とは
- ☐ 資料6 社会教育主事・社会教育指導員が発掘するための仕掛けとネットワークづくりに向けた方策案
- ☐ 資料7 第28期世田谷区社会教育委員名簿
- ☐ 資料8 第28期世田谷区社会教育委員の会議事務局名簿

【資料1】意見交換図

関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策

どんな状況にあっても生きづらさを感じず
前向きに生きていくための環境のあり方

当事者を
「共の世界」や公へつなぐ

インフォーマルな
「共の世界」を豊かにする

人びとのインフォーマルな出会いとは、日常の中に偶発的に埋め込まれている人との出会い、交流、楽しみ、その中で育ちあったり、自然と助け合える関係が生まれてくるといった場や機会のことをいう。

インフォーマルに交流する、あるいは関係をつくっていくことによって初めて身近なところでSOSを出せる機会がつけられるのではないかな。

遠いけれどもインフォーマルにふだん話ができる仲間の方がサポートネットやセーフティネットになっていくのではないかな。

「共の世界」を育む
プラットフォームをつくる

インフォーマルに人が集うには、集まりやすい環境と、それぞれが横につながっていくようなプラットフォームが必要。

区内には子ども・若者支援関係団体は非常に多く存在しているが、横同士など隣接領域で一堂に会することがなく、プラットフォームになる仕組みがあまりないのではないかな。

報告書のコラムにあるように、様々な若者にかかわる団体や若者自身も一緒にネットワークをつくることを目的に動き出している団体がある。こうしたプラットフォームを豊かにすることが大事。

第三の大人の
ネットワークをつくる

第三の大人とは、親や教師以外の大人で地域に心を寄せるボランティアの人々のことをいう。

都市化する中で、もう一度第三の大人に焦点をあてて、生きづらさに寄り添っていくような関係性を持つ第三の大人を発掘し、つなげていくことが重要。

区でも各種支援事業を実施しているが、それでもこぼれ落ちてしまうのは、こうした生きづらさに寄り添える関わりの方が不足しており、普通の一般の方々を発掘し、ネットワークをつくる必要がある。

困難を抱える子どもの特徴と対応

子どもの貧困や関係性の貧困も含め、学校ではなかなか見えないが、BOPでは親の様子や子どもの様子がわかることはあるのか。

学校ではおとなしい、家へ帰ってもおとなしいが、学童クラブの特にひとり親家庭の子どもの場合、BOP、学童に来ると暴れるというケースがあった。親に対して気を遣い関係性の貧困との関係があるのでは。

微弱なサインをキャッチする大人の側のセンスがかなり問われる。

子どものプライドは大人以上に高いので、仲間がいる中で比較的自分が困難だというSOSは出さないことが多く、子ども食堂の帰り道で本音を出すことがあるため、聞き逃さないようにしている。

子どもより親のかかわり方が変わってきているので、特に低学年では親のことを気にしたり、よく見られたい感じが見受けられるので、学校や家庭でもないBOPでは羽を伸ばす姿は見られる。

学校では見せないがBOPで見せるとか、児童館で見せるとか、そうなることが重要ではないかな。

BOPや学童、児童館という場所は、何らかしらの状況をつかむ場所になり得ると思うし、そういう場所でも子ども食堂や学習支援などが行われればつながっていくことにもなるのではないかな。

暴れている子どもなど、大人から思うと不適切な、とても扱いにくい状況を出す子どもというのは、心のどこかにうまく吐き出せない苦しさをもっていることがある。

最近、両親とも忙しい家庭が増え、持ち物や何かにつけ、昔では考えられないようなケースも見受けられる。基本的な家庭教育の部分ででききれていないことがあると思う。

困難な家庭に気づくと、子どもは微弱なサインを学校だけではなく、いろいろなところで出しているというのが見えてきた。

子どもは自分の置かれている状況が困難かどうかは、ほかの家庭を知らないの、特に関係性の少ない子どもほど自分が大変な状況とは理解していない。

悪いこととレッテルを貼るのではなく、その子の困難はどこにあるのか、なぜそういう行動を取るのかということをいろんな大人が見る中で話し合うことが大事。

子どもの貧困と関係性の貧困

世田谷区の子どもの場合、正直貧困の現状が実感できない。

「貧困」という言葉にすごく抵抗感を感じてしまうが、少数派の子どもたちをどうやって救うかという話か、精神的な部分でその育ちを孤立させない、家庭を孤立させないで地域全体でという話が悩んでいる。

子どもの定義をどこまでにするのか。

⇒こども食堂では小中高まで子どもとみなしている。

生活支援を受給するような家庭の話と捉えるのか、それとも関係性の貧困になったときに精神的な乏しさみたいなことを指しているのか、何か一緒に語られているようなところがある。

講師の事例では、経済的貧困の若者が児童館とつながりながら前向きに生きているというケースがあり、前向きに生きるということを考えたときに何がそうさせるのかと言えば、関係性の豊かさと感じた。

経済的に何でも買い与える家庭で、関係性の薄い子どもは自己主張のために大きな声でその場を収めるということが見られるため、経済的よりも関係性のほうが重要ではないかと思う。

区の貧困調査もこれからなので、国の相対的貧困率 13.9%という数字があるが、区はこれより高いのか。

経済的貧困と関係性の貧困は相乗効果があると捉え、この 2 つは別物ではなく絡み合っていると捉えている。

すごく密に関係している子は、小さいうちからいろいろな SOS を出したり、この人はどうかというアンテナがすごく良くはれている。

子どもの貧困の目安として、区の就学援助の受給が参考になるが、イコール子どもの貧困とは言い切れないところがある。

第 27 期報告書の P27 では、複合的剥奪としての子どもの貧困を図式化したものだが、経済的貧困の裏に隠れているものを見ると、そのコアな部分は実は関係性ではないかということにたどり着いた。

裕福でも意外と囲われている子は関係性がすごく微弱で、この人は大丈夫な大人かそうではない大人かのアンテナの感度が少し悪いような気がする。

貧困ではないような方も就学援助を貰っているが、例としてあがっているのは個人的にはレアケースではないかと捉えている。

前期の提案、提言の 3 つの方向性の具体化は確かに検討していくべきと思うが、区の施策ができていても、子どもたちにつながっていないというところの具体性を考えるのは非常に重要と考える。

前期も子どもの貧困の定義について議論したが、結果として、経済的に厳しい親子の状況もあるが、親の年収でははかれない事例もあり、裕福な家庭であっても関わりにおいては非常に貧しいことがある。

「どんな状況にあっても・・・」というサブタイトルがあるが、やはり一部の子ども話ではなく、区の子どもみんなが自己肯定感を持って目標を持って生きていけるなど含め話し合えればと感じた。

【資料2】現代的貧困の共通理解に向けたメモ

作成 萩原（駒澤大学）

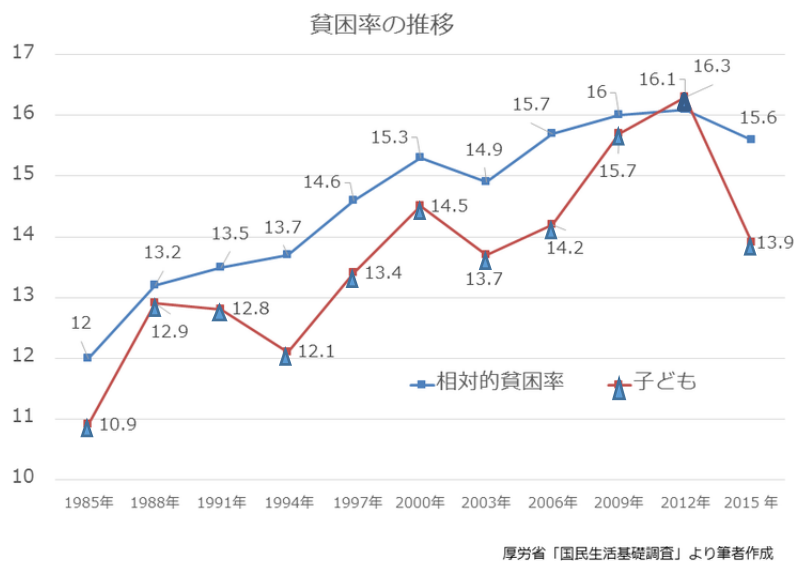
貧困とは：生活するうえで「あてはならない欠乏」状態のこと

（『現代社会福祉事典』有斐閣、2003年）

1. 古典的貧困と現代的貧困

古典的貧困（戦後復興期）：経済的貧困（絶対的貧困・共同貧）

現代的貧困（バブル経済崩壊以降）：経済的貧困（相対的貧困）＋関係性の貧困



2. 現代的貧困の特徴：経済的貧困と関係性の貧困

（1）経済的貧困：モノとカネの欠乏による「財の貧困」

（2）関係性の貧困：「財の貧困」以外の欠乏状態すべて

例えば：体験機会、学習機会、遊ぶ機会、友達家族などとのコミュニケーション機会の欠乏、進路選択の自由や将来展望・希望の剥奪、その他生活上の選択可能性の制限・制約
⇒子ども自身の自己形成への悪影響として、社会的孤立、自尊感情・自己肯定感の低下、自信回復力（レジリエンス）の低下など。

（3）関係性の貧困＞社会的孤立

社会的孤立は関係性の貧困による多様な機会の剥奪や自由の制限によってもたらされる一つの状態。

3. 現代的貧困をめぐる2つの見方—個人主義的貧困観と社会構造的貧困観

（1）個人主義的貧困観：貧困は個人の問題であり特殊な問題であるという見方。

（貧困対策は一部の人間を対象にしたものにすぎない。）

<主な要因>

・当事者ないし親の努力不足。

- ・当事者ないし親の自己責任。

＜主な方策＞

- ・多少の経済支援（ベーシックインカム保障）。
- ・自助努力に向けた叱咤激励（社会的恫喝）。

例えば、「社会が求める能力を早いうちから身につけておけ」「今から就職に向けて頑張らないと脱落してしまうぞ」「人生の落伍者になるぞ」「将来何があるかわからないから今から保険かけとけ」「それが出来ないのはお前の責任だぞ」・・・など。

（２）社会構造的貧困観：貧困は社会構造の問題によってもたらされているという見方。

＜主な要因＞

- ・非正規雇用率の拡大（H29 37.3%）：就労できても不安定雇用状態での生活
- ・住宅供給の制度的不備：高コストの住環境
- ・消費主義社会（サービス社会）への移行：暮らしのあらゆる営みにお金がかかる社会
- ・個人情報への過剰な保護：他者や関係機関・団体同士の密なつながり機会の大幅縮小
- ・地縁ネットワークの衰弱：身近な地域の共助の働きが不全化

これらによってもたらされる経済格差の拡大と階層の固定化（日本型階級社会の誕生）

図1 正規・非正規雇用者数(実数)

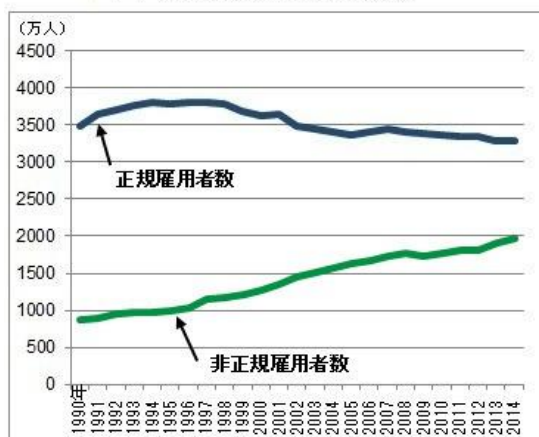
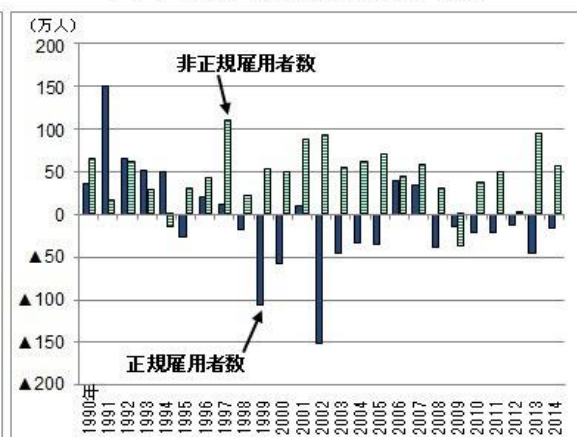


図2 正規・非正規雇用者数(対前年増減)



＜主な対策＞

- ・当事者へのエンパワーメントと社会基盤の整備
- ・就労支援、学習支援、経済支援、社会参加・参画支援など、多角的包括的な支援

参考文献 阿部彩『弱者のいない社会』講談社現代新書、阿部『子どもの貧困』岩波新書

金子充『入門貧困論』明石書店等

【資料3】公開ワークショップチラシ

主催：第28期社会教育委員の会議

みんなで語ろう！ 子どもの貧困と関係の豊かさ

子どもの貧困は、特に経済面や学習面を通じ、子どもをさまざまな関係性から疎外し、孤立化させる恐れがあります。孤立した子どもは、自尊心や自己肯定感を養われることなしに、社会に出されることになります。こうしたことから、社会教育委員の会議では、社会教育的観点からのアプローチとして「関係性の貧困」に着目し、貧困からさまざまな関係や場への参加やつながりから疎外される因果関係とは何か、また課題からどのような環境整備に向けた方策を考えられるのか、地域で子ども・若者に関わるまたは関心のある方々とともに考えます。



プログラム

日 時：平成31年2月24日（日）

13:30～16:30（受付13:00～）

会 場：世田谷区役所第3庁舎3階「ブライトホール」
（世田谷区世田谷4-21-27）

対 象：区内在住・在勤・在学者

定 員：60名（抽選）

参加費：無料

申込み：[裏面をご覧ください](#)

問合せ：世田谷区教育委員会事務局
生涯学習・地域学校連携課

TEL 03-5432-2733

第1部 基調報告

社会教育委員の会議の取り組みからの問題提起

「子どもの貧困をめぐる課題－『関係性の貧困』を中心に」

報告者：第28期社会教育委員の会議議長 萩原建次郎

第2部 リレートーク

地域共生のいえ「岡さんのいえTOMO」代表 小池良実氏

せたがや子ども食堂みつと代表 村上由美氏

第3部 ワークショップ

インフォーマルな「共」のつながりを豊かにするために

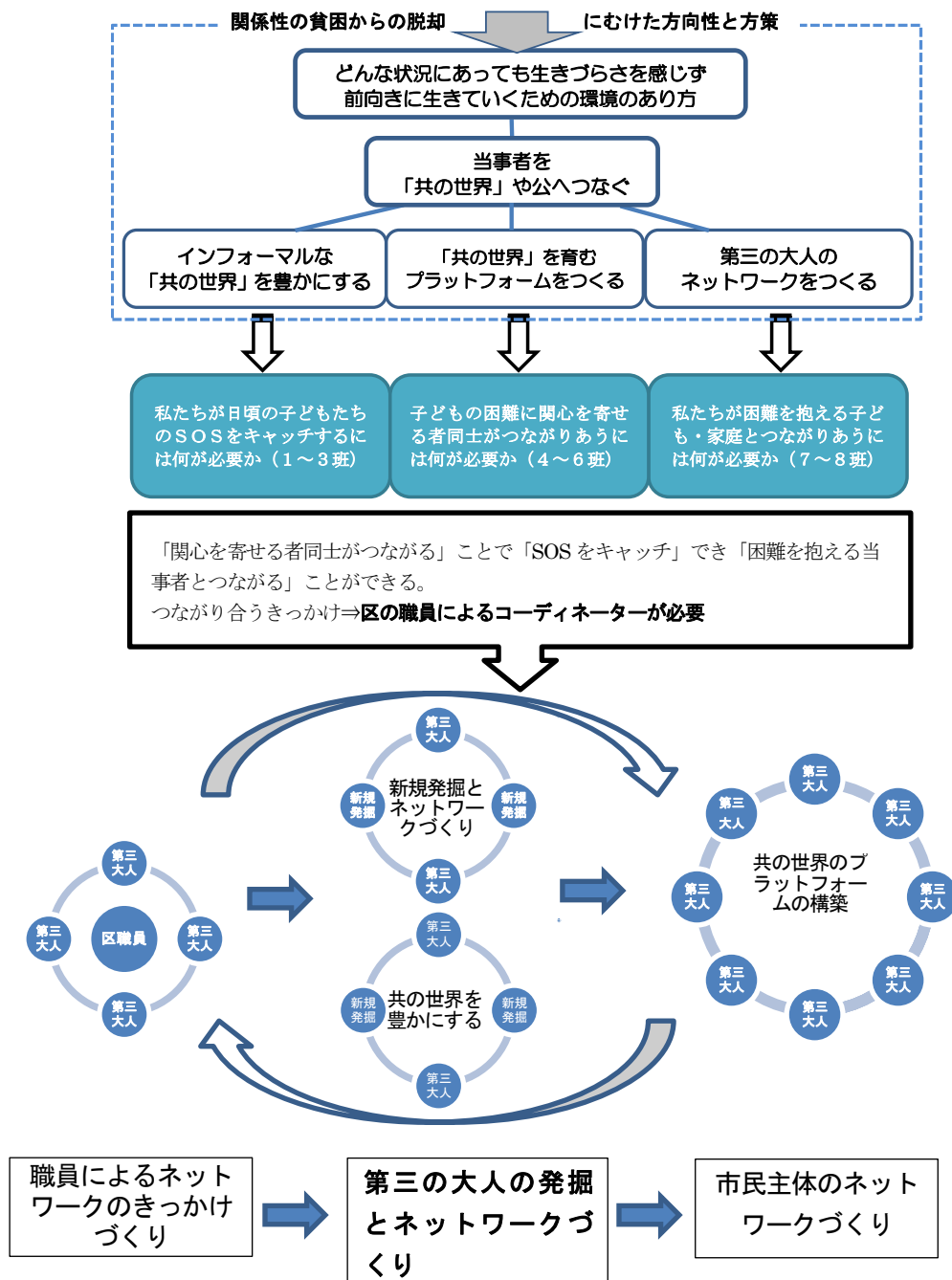
交流とネットワークづくり（自由参加）

プログラム終了後、つながりをより豊かにするための機会を
ご用意しています！

社会教育委員の会議とは

社会教育委員は、教育委員会の行う社会教育行政に関する諮問機関として設けられ、社会教育活動の拡充振興を図るため、広く各界より知識と経験を有する方々の協力を得て、社会教育活動を推進しようとする制度で、教育委員会が委嘱しています。現在、第28期の委員が活動を行っています。

【資料4】 第三の大人の発掘とネットワークづくりに向けた仕組み案



【資料5】社会教育主事・社会教育指導員に期待される役割とは

□ 社会教育の定義（社会教育法第二条）

この法律において「社会教育」とは、学校教育法又は就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律に基づき、**学校の教育課程として行なわれている教育活動を除き、**主として**青少年及び成人**に対して行なわれる**組織的な教育活動**（体育及びレクリエーションを含む。）をいう。

□ 社会教育主事

社会教育主事は、社会教育法に基づき都道府県・市町村の教育委員会に置くこととされている**専門的職員**であり、地域の社会教育事業の企画・実施及び**専門的な助言と指導**を通し、**地域住民の学習活動の支援**を行なっている。

【社会教育法】

・ 第九条の二

都道府県及び市町村の教育委員会の事務局に、社会教育主事を置く。

・ 第九条の三

社会教育主事は、社会教育を行う者に専門的技術的な助言と指導を与える。ただし、命令及び監督をしてはならない。

□ 社会教育指導員

社会教育指導員は、**社会教育主事を補佐**し、専門的な助言と指導を行う。

【地方公務員法第三条第三項第三号に規定する非常勤特別職職員】

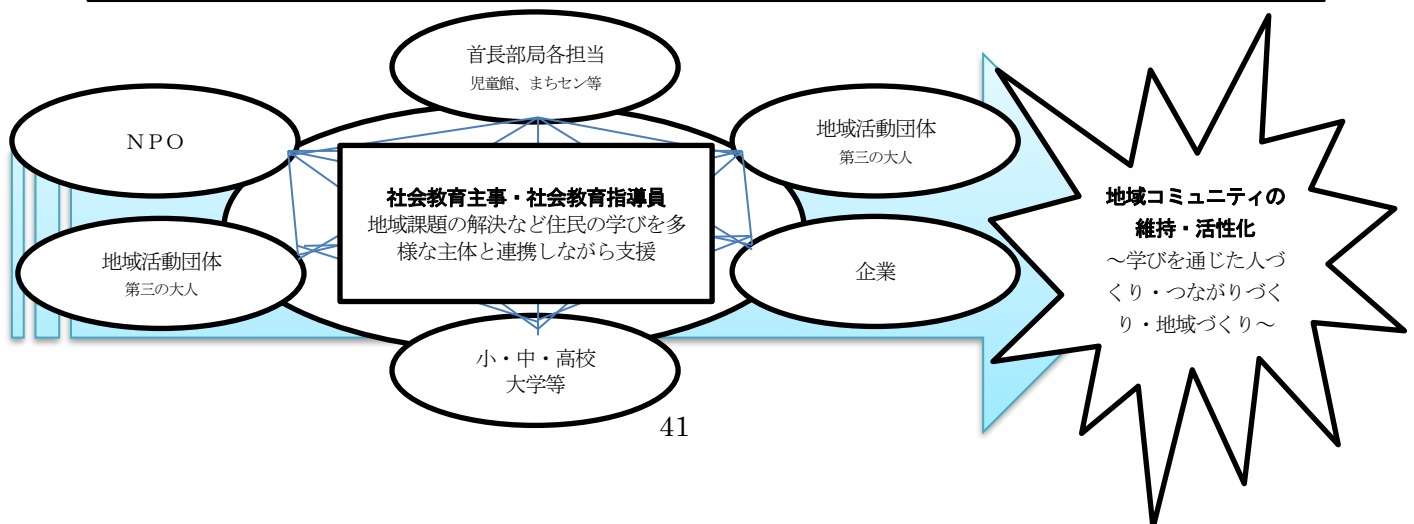
□ 期待される役割

- 地域の多様な専門性を有する人材や資源をうまく結びつけ、地域の力を引き出すこと。
- 地域活動の組織化支援を行い、地域住民の学習ニーズに応えていくこと。
- 学習者の地域社会への参画意欲を喚起すること。
- 学習者の多様な特性に応じて学習支援を行なうこと。
- 学習者の学習成果を地域課題解決やまちづくり、地域学校協働活動等につなげること。

今日、我が国では、少子高齢化、核家族化、都市化など、急激な社会の変化を背景として、地域においては、健康・医療・福祉、防災・減災、若者の就業、青少年の健全育成など多くの課題を抱えている。このような中、社会教育行政には、多様化・高度化する地域住民の学習ニーズに応えるだけでなく、地域の様々な課題解決に主体的に参画する人材を育成するとともに、地域住民同士の絆づくりを進める活動等を通して、地域の活性化を図っていくことが強く期待されている。

「人づくり」「地域づくり」「ネットワークづくり」といった今日、社会教育行政に期待される役割を果たす上で、**社会教育主事はその中核的役割を担う者**であり、教育全般に関する幅広い知識・技能に加え、地域の社会教育活動の活性化のため、**ファシリテーション能力**をはじめ新たな資質・能力が求められるようになってきている。

参考文献：「社会教育主事の養成等の在り方に関する調査研究報告書」国立教育政策研究所社会教育実践研究センター



【資料6】社会教育主事・社会教育指導員が発掘するための仕掛けとネットワークづくりに向けた方策案

【具体的な方策を考えるための深掘り作業】

市民主体の「共の世界」を豊かにするために、第三の大人・若者を発掘し、ネットワークをつくることが重要であり、社会教育主事・社会教育指導員による仕掛けやコーディネートが必要である。前回のアイデアを元にさらに掘下げ、より具体的な方策を考える。

方策の柱1 第三の大人・若者の発掘と顔の見えるネットワークづくり

○学校カフェや地域サロンの開催

- ・地域を巻き込む学校カフェを通した第三の大人・若者の発掘とネットワーキング
- ・第三の大人の核となる人材発掘のためのまちづくりセンターカフェの開催
- ・身近で行きやすい施設でのカフェやサロンの開催

○講演会・養成講座・ワークショップの開催

- ・講演会や養成講座の開催と第三の大人・若者（ユースサポーター）の発掘のための新規活動
 - 若者対象のイベント開催と第三の若者（ユースサポーター）の発掘と育成
 - 大人対象のイベント開催と第三の大人の発掘とネットワークづくり
- ・地域ごとによる複数回のワークショップ
- ・子育てを介したネットワークづくり
- ・保護者がつながる企画の開催

○その他

- ・マインドセットとスキルセット
- ・研修手法「コミュニティオーガナイズング」
- ・地域で活動している人の見える化

方策の柱2 つながれない子どものケア

○つながりをもてない子どもへのケア

- ・ネットでつながる学習支援
- ・その他

- 貧困対策は、寺子屋というか学習をあげることが必要ではないか。

今年から中学校ではeラーニングが開始される。これをもとに考えたのが、各地でインターネットがつながるところでタブレットなどの機器を2、3台を数カ所、設置することでスモールステップというか、段階を低くしてそこに来させる。同時に学習する子どもと何かをしたい、手助けをしたいという方が広がるように、カフェや子ども食堂などに設けてはどうか（⇒ネットでつながる学習支援）。

- 「学校カフェでお茶会」というタイトルで、話題を設定しておしゃべりする場の設定が必要ではないかと思う。それは答えのない課題や話題の方が面白くて、時間を決めて開設する。近年、学校

の敷地にまちづくりセンター等が設置されるところが少しずつ増えており、学校という場だからこそ、地域の人が行きやすかったり、子どもがいなくてもちょっと行ってみようという気になるのではない。また、ネットワークをつくるために、来た人たちでお茶会を企画してもらったり、それぞれやりたいことを募集したりすれば、そういう人たちがお茶会の推進力になり、「第三の大人」になっていくのではないかと（⇒**地域を巻き込む学校カフェ**）。

- 勉強したいができずにいる子どもの声を聞くので、異学年がいるようなところで教えてもらったり、学習できる場所があればいいのではないかと。そこで教えるのは自分よりちょっと上の大人（若者）、小中学生なら高校生や高校生からすると大学生など、年がかけ離れた大人ではなく、年齢の近い大人（若者）を発掘できたらいいと思う。区内でもこのような活動をしていると思うが、横のつながりがいないためになかなか広がっていかないので、どうつなげていくかが課題だと思う（⇒**第三の若者（ユースサポーター）の発掘とつながりづくり**）。
- 若者を対象に世界的に広がりを見せているSDGs（持続可能な開発目標）を使い、「2030年持続可能な未来のために―誰も置き去りにしない社会を考える（仮題）」というイベントの開催である。このイベントの目的は、中学生から39歳ぐらいまでの若者に豊かな「共の世界」について体験し、知ってもらうとともに、活動を通して困難な状況にある子どもの発見に伴い、「第三の大人」となる若者の発掘と育成を目指すことにある。内容としては、グループディスカッションやワークショップなどを取り入れて、参加者に自由な意見を出してもらうとともに、交流を図る。ファシリテーターとして大学の先生などに依頼する。このイベントを数回開催し、具体的な取り組みのまとめを中学校とも連携して特別授業でワークや発表をする。必要な場合には、地域で若者支援の活動をしている団体や個人に関わってもらう。社会教育主事には、イベントの告知やファシリテーターの依頼のほか、異年齢の活発な交流と、若者自ら運営して楽しい場となるように、サポート役として関わってもらう（⇒**若者対象のイベント開催と第三の若者（ユースサポーター）の発掘と育成**）。
- 子ども・若者の声を尊重する社会に向けてというコンセプトで、「子ども・若者のアドボカシー（子ども・若者の声を聞くということ）」というイベントを開催する。第三の大人を発掘し、ネットワークをつくるための仕掛けとして、核となる方々に関心がありそうな方を誘うようお願いする。また、互いに継続的につながり合い、支えあうためにアドボカシーの講演会を開催して、関心のある方には学習会やアドボカイト養成講座につなげていく。さらには事例検討会などに展開し、これまでの活動枠を超えた交流によって、新しい活動、新しい「第三の大人」の発掘につなげていく。社会教育主事には、これらの活動が円滑に行なわれるように助言やサポートをしていただく（⇒**講演会や養成講座の開催と第三の大人の発掘のための新規活動**）。
- 第6回では公開ワークショップを行ったが、思いのほか関心のある方が集まっていた事例があるが、区全体のものとして、ワークショップのPRや周知が足りない部分があると思う。いろいろな方の知恵をいただくにも、やはりあのようなワークショップを例えば地域ごとや支所ごとなどで開催する必要があると感じた。また、ワークショップは1回きりではなく、複数回やることによって顔見知りになり、ネットワークのきっかけになるのではないかと。地域の中には子どもに関わる人がたくさんいるし、普段から交流があるので、そういう人たちに協力を仰げば、地域ごとでいろいろな展開ができるとともに、「第三の大人」も増やせるのではないかと。社会教育主事には、ワークショップの仕掛けを担っていただくが、そこにパイプ役の方々が必要だと思うので、学校や地域、行政に通じている方々が加わっていただけるといいのではないかと（⇒**地域ごとによる複数回のワークショップ開催**）。
- 区の施策として、すでに子ども・若者に関する横断的な施策があることを聞いたことがあるが、公の部分から共にするにはどうすればいいのかという論点が大事ではないかと思っている。やはり

一番大事なのは、社会教育という陰には、共の核となる人材発掘、ポイントになる人物を発掘することがとても大切ではないかと思う。なぜならまちづくりセンターは地域の人材情報を一番持っている、この情報を活用しない手はないのではないかと思う。まちづくりセンターの立場では難しいかもしれないがやはりボランティアな人材は誰なのか、核になり得る存在は誰なのかという人を抽出して推薦していただく。そして、その情報から社会教育主事がイニシアティブをとり、ネットワーク会議を開く。さらに、関係性の貧困に関する協議及び実施を行い、最終的にはまちづくりセンター内に幅広い人材が集まるイベントやカフェをつくる方向がよいのではないかと（⇒**第三の大人のネットワークの核となる人材発掘のためのまちづくりセンターカフェの開催**）。

- 社会教育主事にはテーマを掲げたカフェやサロンを開催していただく。例えば、学校やまちづくりセンター、地区会館等、区内には身近な施設があるので、自分が行きやすいところや興味関心のあるテーマのところに行ってもらおう。そして、集まった人たちを「第三の大人」として発掘するが、若者であれば小中学生に勉強を教えるなどのつながりもできるのではないかと思う（⇒**身近で行きやすい施設でのカフェやサロンの開催**）。

- 子育て経験のある親を対象に関心のあるテーマでカフェやサロンの開催もよいのではないかと。今は働いている夫婦が大変多いうえ、子育てに悩んでいる親も忙しくて、親同士が話ができる場所がなかったり、つながっていないようなことがあると思うので、若い子育て中の方も含めて、土日開催で男性にも参加してもらい、その中で第三の大人を広げていったらいいのではないかと。特に子育て中の親は、いろいろなことが気になりながらも実は聞けないというところがあって、ネットで調べて子育てをしているという方も多いと思うので、貧困の部分も同じだがなかなか聞きにくいので、地域や社会で子どもを育てるという観点からすると、そういう方を対象にしたネットワークもよいのではないかと思う（⇒**子育てを介したネットワークづくり**）。

- PTAで言えば、子どもが学校に入ったときに最初に集まることは役員や委員を決めて、その後、いろいろな研修会など先生方と相談しながら企画を進めていくが、先生方は授業があるので、密に話づらい部分もある。社会教育指導員や社会教育主事に望むのは、4月のPTA活動の始めに学校の雰囲気や子どもの様子、その他、PTAについてや研修会などの説明や提案などをいただければ、活動がスムーズになるのではないかと。

私も、中学校のPTA会長の時の事例では、学校の周りに地場産の野菜農家を営んでいる方がいたので、その野菜を使って、家庭科室で朝ご飯をみんなでつろうという企画を行った。1年から3年の保護者が多く集まり、学年ごとに悩みなどを話し合い、3年の保護者がそれに答えていくが、答えられないものは社会教育指導員が答えていくということで、いい具合につながりが持て保護者同士のネットワークが持て、その後の活動にも上手くつながったという実感があつた。中学校になると、親は学校に来づらいけれど、テーマを決めてそれに沿って行く親の集まりが重要になってくるので、社会教育指導員が学校との間に入りコーディネートし、助言を受けながら各学校の実情に沿って行うのでいいのではないかと（⇒**保護者がつながる企画の開催**）。

- 教育委員会として直接できることで言うと、社会教育主事という方がいるので、ここがレバレッジになるのではないかと。ただ、「第三の大人」や「共の世界」をつくっていくという意味では、期待されているようなパフォーマンスが現状発揮できていないように見えるので、マインドセットとスキルセットを変えたほうがよいのではないかと。マインドセットとは、頭の使い方とか、自分の仕事はこうあるべきだとか、こういうふうに行動するべきだという行動パターンとか、認識などそういうものを、なにができるようになるとか、やっちゃいけないとかじゃなくて、そもそもの考え方を変えた方がよいのではないかという意味である。スキルセットは、学校の先生は教育するとか、行政の方だったら行政事務をしっかり回すなど、その人が持っているスキルがあると思うが、

今もっているスキルが必ずしも期待される役割にあっているかどうか分からないわけで、そうすると、マインドセットとスキルセットの両方を入れかえてみることで、全部丸ごと入れかえる必要はないが、少し変えることでできることとか、行動が変わってくるのではないかという意味で提案した（⇒マインドセットとスキルセット）。もうひとつ、社会教育主事の研修で言うと、「コミュニティオーガナイズング」という手法があるが、何かというと、もともと公民権運動発祥で、オバマ氏が大統領になったときの市民運動をつくったメソッドで、市民活動とか、いろいろな当事者を一緒に巻き込んで社会的な動きをつくっていきこうというメソッドである。自分のストーリーをちゃんと語ることで自分の課題をみんなの課題にして、みんなの課題を今解決しなきゃいけない、そのアクションはこれなんだと明確に伝えていくことで、どうせ無理だよと思っている人とか、関係ないよと思っている人も一緒に運動に関わっていきこうというプログラムを。社会教育主事や社会教育指導員がまず第一歩で巻き込みたい人と一緒にやってみて、私たちは何ができるのか、誰と一緒にやらなきゃいけないのか、この場合の当事者は誰なのかみたいなことをちゃんと考えていく。そのやり方を社会教育主事にあげるのではなく、その方々が考えていけるような土壌とか、ツールとか、ネットワークをつくっていくというのが大事なと思った（⇒研修手法「コミュニティオーガナイズング」）。最後に、期待される役割は全部できていると思うが、例えば、大学の事例だが、自分の学生以外に地域の人へのセミナーとか、ワークショップをやっているときには、それは学校教育ではない。私は大学に所属しているが、自分の授業ではない教育をすると社会教育になって、この辺は意外とシームレスではないかと思う。地域にある立場があって、そこを少し踏み越えて何かをやろうとするときに、これは結構やれる、逆に社会教育主事が自分の仕事の内側でこれをやろうとすると結構ハードルが高くなってしまう。そうすると、この役割を担っている人というのは、実は探していくと結構いて、そのつもりもないし、そういうふうに誰からも見えていないけれども、実際やっていることはこれなんだみたいな人というのは結構いっぱいいるので、その人を地域の中で見える化して、何かあったときにはあの人に相談に行きなさいみたいにするとか（⇒地域で活動している人の見える化）。

【資料 7】第 28 期世田谷区社会教育委員名簿

	氏 名	選 出 母 体 等	備考
学 校 教 育 関 係 者	みね ぎし あつ こ子 峯 岸 敦 子	世田谷区立小学校長会 世田谷区立松原小学校長	平成 30 年 6 月 1 日～
	じん ぼ とし ひこ 神 保 敏 彦	世田谷区立中学校長会 世田谷区立千歳中学校長	
社 会 教 育 関 係 者	もり おか み か 森 岡 美 佳	世田谷区青少年委員会会長	平成 30 年 6 月 1 日～
	むら かみ ゆ み 村 上 由 美	世田谷はぐくみプロジェクト 代表	平成 30 年 6 月 1 日～
	ごん だ くに こ子 権 田 邦 子	世田谷区青少年委員 O B 会 理事	
家 庭 教 育 の 向 上 に 資 す る 活 動 を 行 う 者	やま ぎき つとむ 山 崎 勉	世田谷区保護司会理事	平成 30 年 6 月 1 日～
	よし おか やす こ子 吉 岡 泰 子	元 世田谷区立小学校 P T A 連合協議会会長	平成 30 年 6 月 1 日～
	ゆ ざわ とし ふみ 湯 澤 俊 文	元 世田谷区立中学校 P T A 連合協議会会長	
学 識 経 験 者	はぎ わら けん じ ろう 萩 原 建 次 郎	駒澤大学教授	議長
	さか くら きょう すけ 坂 倉 杏 介	東京都市大学准教授	副議長

任期：平成 30 年 6 月 1 日～令和 2 年 5 月 31 日

【資料 8】第 28 期世田谷区社会教育委員の会議事務局名簿

肩 書	氏 名	備 考
生涯学習部長	はな ふさ ち さと 花 房 千 里	～平成 31 年 3 月 31 日
生涯学習部長	みな がわ けん いち 皆 川 健 一	平成 31 年 4 月 1 日～
生涯学習・地域学校連携課長	た むら とも あき 田 村 朋 章	
生涯学習・地域学校連携課 社会教育係課長補佐	おお い たけ し 大 井 健 史	
生涯学習・地域学校連携課 社会教育担当係長 社会教育主事	み その う けい いち 御 園 生 恵 一	
生涯学習・地域学校連携課 社会教育係主任	はし もと あ い 橋 本 亜 依	